

187  
2  
98

蝦夷みやげ

上



序



古稱蝦夷者。指奧羽北越土酋不服

王化者名焉耳。非北海毛頭也。所謂

後方膽振渡島日高等名。在奧羽諸

國。非北海沙漠之地名。迨後世今國

郡。取古名冒之也。今之極矣。古詩謂

南慎蘇鞞者。齊明之朝。阿部比羅夫





所征。亦非今之蝦夷也。討肅慎獻生  
罽二罽皮七十枚。及養老四年。靺鞨男  
等觀靺鞨風俗之事。則今之蝦夷也  
歟。多賀城碑。為去京一千五百里。去  
靺鞨國界三千里。則指南部以北。為  
靺鞨明矣。蓋古內國人。入北海者。北  
與渙人。僅占居十海邊而已。其後有

藤原秀衡。能黨遁而住者。且源義經。  
主從入夷地。有證左焉。長祿年間。武  
田信廣。始討北海。占其地。而河野小  
林。安東。今井等。皆據各所。內國人住  
夷地。自是多矣。天正十八年。武田氏  
朝京師。謁豐臣秀吉。則為北海之守。  
更松前氏。爾來數百年。毛夷皆納租



於松前氏為下民。松前氏亦置之度外。不以國法治之也。至明治新政。全島盡歸王化。而古毛夷風俗。年減少。如彼面手花點女子。殆不能見。但四五十歲以上老婦。僅遺舊態而已。素毛夷種族。未審自何地移住焉者。或曰自北韃邊出來者。視其醜顏。慶

鞞濃眉深目。如非內地人種者。而如文身斷髮左衽跣步。則東夷古風。未化內地時俗者也。今也設學校布教化。而風俗言語。亦隨而變革。數十年後。雖欲知舊時風俗。不能也。斯書不知何人著作。能模寫古毛夷事跡。又詳言語動作。畧文舍主人。欲上梓以



公干也。使北遊之人知蝦夷前古之風。余喜其舉。聊費校讐之勞。乃書之以弁焉。

明治三十二年秋九月

鴻齋居士石川燕



○凡例

○斯書何人の手よ成る事を知らむ傳言ふ舊松前藩士享和年間蝦夷巡廻の時筆記する所に係るされど幾度か轉寫して文の脱落する所もあり文字は誤謬等も有て意義の通し難き所少かりげ今大略校正せんと雖も敢て原文を改正せざばハ意味の違ふん事をかそきてなり

○引書等も往々誤謬有るをけきども盡く校正せらるゝ暇なきは大約原文のまゝ之を寫す

○圖畫も甚だ粗漏よて僅よ衣服骨格のみを描けるやうに覺ゆ然れども畫工をして精密に改寫せし先婆看客の眼を喜むしむるに足れども或ハ本事



を失ふん事を恐ま原圖のま、模寫して之を加ふ  
 請ふ其拙きを咎むる事ふられ  
 ○言語も蝦夷一般同一ならび東西大に異なるもの  
 あり稱謂の如きも亦同トからば故に前後差異を  
 有る事あり讀者宜しくこれ観察すべし  
 ○斯書原名蝦夷奇觀と題して横披三巻と爲す今二  
 冊と爲して蝦夷みやげと改む

蝦夷みやげ

原名蝦夷島奇觀上

無名氏 著

石川鴻齋 閱

原序  
 凡そ本朝いよ  
 は皆蝦夷と稱  
 ことにも多  
 故に多  
 奏

へ皇城千里の外皇命よ服せざる者  
 せり中就く東北の地廣大にして夷種  
 安倍紀氏鮑田渟代より東の地理を  
 王化を布んと言ふより亦遙に年を  
 天下の庶人をして左衽を禁ぜしむ  
 神龜元年多賀城を置て邊夷を威服せしり給ふ延暦  
 二十年の春坂上田村麻呂をして酋長高丸惡路王を  
 誅戮せしより膽澤郡に鎮守府を建て近隣ことく

蝦夷みやげ

石川鴻齋



平均す爾來世々の將軍追討して竟し夷胤絶たり然るに津輕郡外ヶ濱宇鐵邑は五六十年前までハ蝦夷容貌の者たり一か領主命トて王化し服従せしむ今は唯渡島の蝦夷のみ衽を左し一足を蹠に一言語のみとされざるなり是も去年の春大樹君嚴命ありて教化を施行せし故毛夷稱服する者多し故に其舊來の形容をうかひ知らん事と思ひ尚見ぬ人の為よもと聊か寫録して蝦夷島奇觀と稱す

案スルニ文中ニ渡島ノ蝦夷ノ衽ヲ左ニシ云  
トアルハ今ノ北海渡島ノ國ナルヘシ渡島蝦夷ノ稱始メテ日本書紀齊明天皇四年ノ條ニ見

ユ然レ共秋田野代ノ蝦夷ヲ討ツトキニ聚メテ饗セシ者ナレハ今ノ北海ノ渡島ニハ非ルナリ或ハ云ク渡島ハ佐渡ノ島ヲ指ス者ナリト未タ孰レカ是ナルヲ知ラス斯書舊幕府徳川氏ノ中ゴ口記セシ者ト覺ユ此時ヨリ五六十年前マデハ北地ノ毛夷往々津輕海邊ニ居住センモノナルヘシ而シテ此頃ヨリシテ渡島ノ稱有テ松前氏ノ配下ニ屬スルト雖トモ毛夷ノ種族ハ從前ノ風俗ヲ守リテ内地ノ法ニ化セザル者ト見ヘタリ或ハ松前氏ノ政令行ハレサル地ハ今ノ膽振日高十勝釧路等モ一般ニ渡島ノ蝦夷ト稱セラル者ニヤ後人ノ精考ヲ冀望ス



○ 松前 本名マツマエ 福山より東蝦夷地百里計りにサルモン  
 へツとて河有り此山奥ヤイハルと言る 年老の酋  
 長僕巡行せる頃道の傍らに出進みてサルモンヘツ  
 の岸は案内に此處の二司某といへる者曰くこの  
 アイノ 夷人の通稱をアイノと云へり 萬葉集をヤイ  
 ハルと古への事を能く知まると云へば則ち酒をす  
 るめて乙名て乙名を稱云ふ昔物語りを為さしむ曰く  
 此東方國よ何色の頃よりか夷人の住居せる事ぞヤ  
 イハル曰く古へ南方神の國より女神一人虚舟に乗  
 りて此邊ふるシツナイは漂着し給ひけり多くの黄  
 金白銀玉器耳盪擲筥鉈子玉盃金箸盃臺其他種々の

珍寶を持て來り此地に着き一と一免風雨をふせ  
 くの室無く食物を求むるに由無し既又饑渴よせほ  
 りぬるおりのづくととる一疋の雄犬來り了神女  
 に近付了馴ま心ありき尾をふり先立つて行くに  
 伴はれて行路大なる巖屈に至れり因て茲に入りて  
 休らふに彼の犬ハ海邊に至りて魚物海草を採り山  
 野は行て菓實草根を啣み來りて飢を助け命をつな  
 かしむかした月日を送るらよ犬と深く親しみて  
 子を産みそれより子孫次第に繁殖して今に至れる  
 あり夫故女夷ハ神女の血脈にして男夷ハ犬の後胤  
 ありと傳へ聞ると語り







日本書紀。齊明天皇五年秋七月丙子朔戊寅。小錦下坂合部連石布大仙下津守連吉祥使於唐國。仍以陸奥蝦夷男女二人示唐天子。書曰。連博德天子問曰。此等蝦夷國有何方。使人謹答。國有東北。天子問曰。蝦夷幾種。使人謹答。類有三種。遠者名都加留。次者名麤蝦夷。近者名熟蝦夷。今此熟蝦夷。每歲入貢本國之朝。天子問曰。國有五穀。使人謹答。無之。食肉存活。天子問曰。有屋舍。使人謹答。無之。深山之中。止住樹下。

案スルニ其最遠ナル者ヲ都加留蝦夷ト名ヅクト云ヘハ北海人ノ奥羽海岸ニ住居スル者タル明ヲカナリ今ノ北海ニ國有ル事ヲ知ラサル者ノ如シ

慶長十五庚戌年蝦夷人駿府江參上

髮	フツツ	鬢	モロシ	頭	シヤイ	額	キウトル	眉	ラスマ	鼻	イトナ	頬	ノタカム
耳	キヤシラ	口	パアラ	脣	クサラ	齒	イン	舌	ハルニヘ	喉	レクツ	髭	レツケ
髮際	シヤイ	刺耳金	ニレカチ	骨	シテル	乳	トラ	腹	ホカン	脇	ヤトホ		
背	ヤトロ	肩	クツヒ	腕	シユム	手	アツク	指	レツクヘツ	爪	アム	臍	ハンタ
腰	イツクウ	脛	コム	臑	ウレコトル	足	バラ	骹	カム	踵	トシユ		

支體ノ夷名遠近訛轉シテ同シカラズ茲ニ僅カニ處々ノ語ヲ雜ヘテ記ス



クナシリ 地名イコリカニ  
首長トキーイ三男



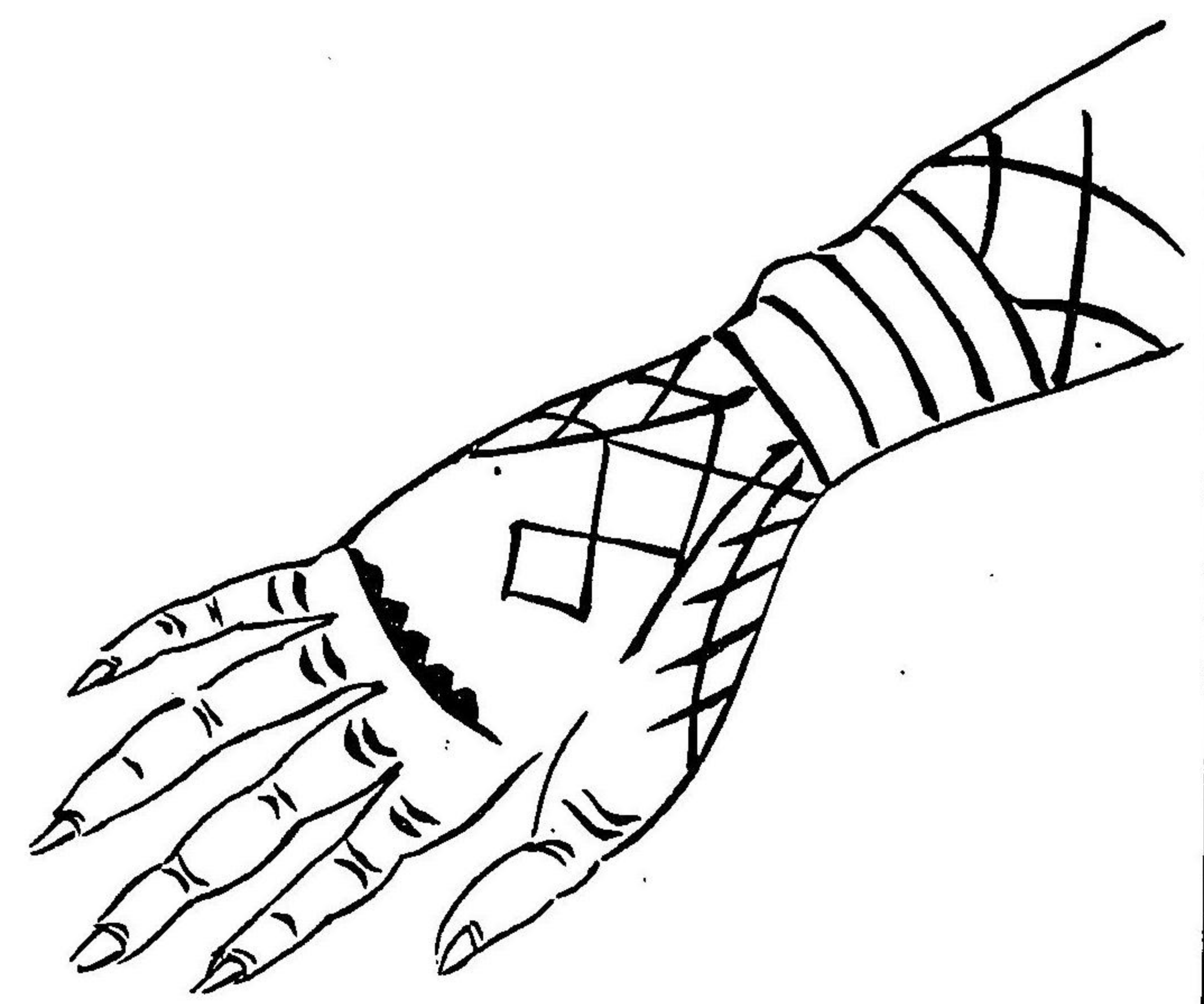
口文 喉玉輪 服 袂 襟 懷 袖 袂 上前 裾





蝦夷うち集りて神を祭る時は實に大禮あり其時の  
酋長たる男夷は冠一ナルを戴き木皮布の服を着し  
太刀を帯したる容貌あり夷言も處々因て轉訛す  
る故に不同ありエトロウ島の夷人は言語貌も少  
異なり髪も本邦の前髪姿あり四方斷髪短し  
女夷は玉器を妝らひ胸に玉輪をかけ裘を着し上に  
木皮布の衣をうち掛け鐵器を持たる圖あり女子の  
通稱メノコ又メノコシ娘をマチ子ボウ婦人をマチ  
と唱ふ日本紀命婦をマチと訛したり髪ハ半ば斷て  
圖の如し喪の時ハ髪を截らば三年に至るまで忌帽  
子を冠りて厚く勤るなり其慎み本邦卑賤の婦人な  
ど及ぶ處よありとぞ

女夷文手之圖





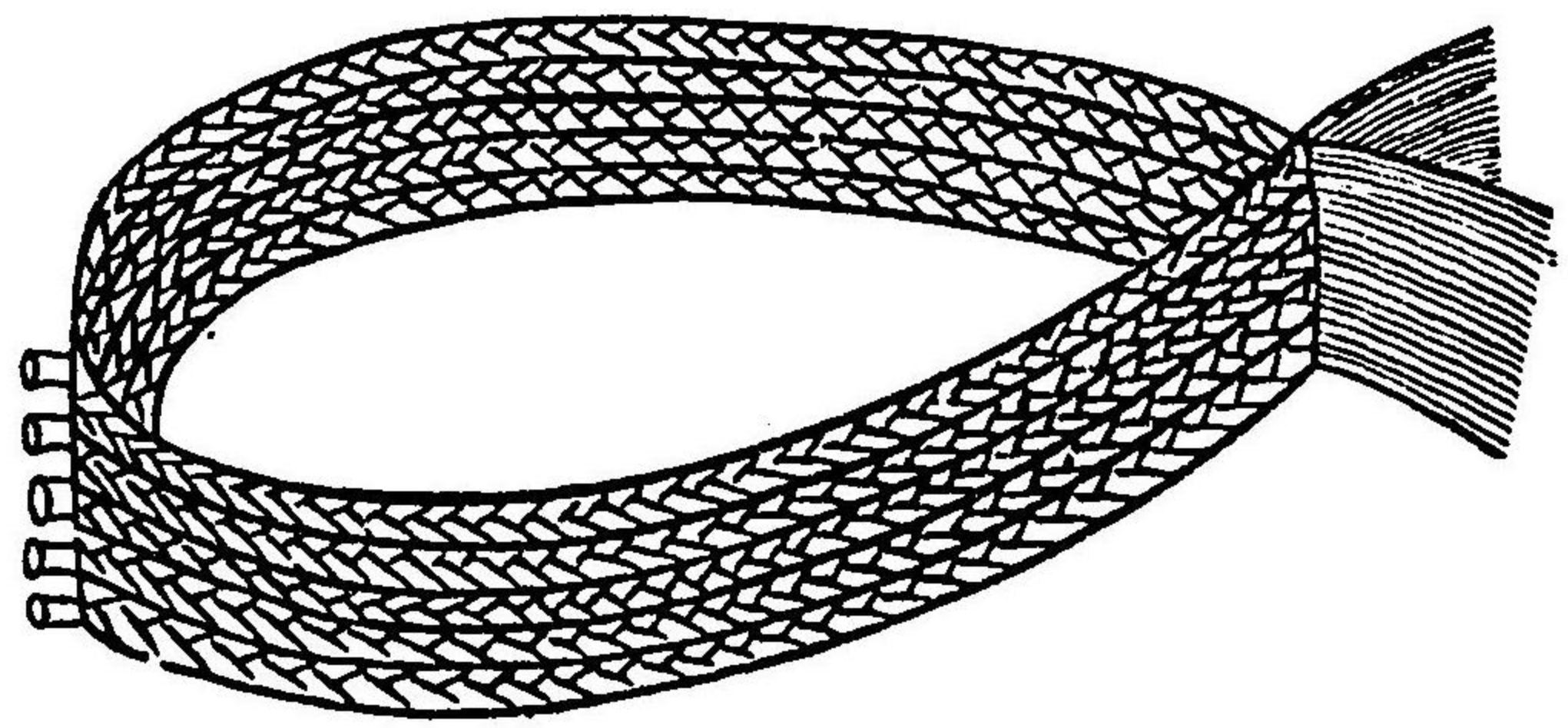
夷人言傳ふるよハ古へコツチヤカモイといふ神有  
了體四尺計り手ハ甚た長し此神處々に住たもふて  
漁獵の道に通カを得たまふ土舎に居て夷人等に魚  
類獸肉などを其憲よりあたへ給ひたる故よ其漁獵  
の術を學むんと近よりて請へは教へられむ夷人等  
を嫌ふよや遂に此地を去りたもふ其神の妻なる人  
別て美麗なりしが手よ色々の文理あり後人かの神  
夫婦の徳を慕ふて其状を寫し傳え多女夷とも今に  
至るまで文身すと古老の口碑なり其住居したもふ  
踞處がよ在り其邊の土中より陶器の碎けたる又玉  
の類あし種々の寶器を掘出す事ありとノツカプの  
酋長シヨンフある者識りき

日本紀神武天皇己未年二月條下 高尾張邑有  
土蜘蛛其人身短而手足長此神稍似焉  
往昔かゝる者を見しよや其傳職の古き據ところ有  
る一近年魯西亞人來り寓せし頃土中を掘りて家を  
造り謂ゆる土舎ある者有り上古よも魯人などの渡  
り來りて住せしを誤り傳へて神と稱するよや元よ  
り無文の地よて手端を文るなどは思ひもよらざる  
に彼のコツチヤの婦人の手よ文あるを見し珍らし  
と思ひてそを倣ふて手よ黥するよや又コツチヤ  
の舊趾と稱する地を掘れむ黒く通明ある王の破れ  
或ハ石弩雷斧等の類辨し難き石器類出る事あり

段夷人言傳 卷上 八 出故舎載



シヤハウベ  
又イナウルと  
名づく



此器は蝦夷の冠なり熊祭りなどの大禮は着せりシ  
 ヤハとは頭の名なりウとは集る意の語ありべとは  
 器といふ意なり木幣を作り木を削りけり了組  
 製するなりトミサンベツと云る呼造曲あり是を俗  
 蝦夷淨瑠璃といふ神靈より授け給え一と言傳  
 へり

元服の禮と同一ヨキ禮五首長六十年以來廢たり  
 男凡そ十五六の頃て結へば以後長を稱す其處  
 を集め出た鼻禪酒然の事あ冠せウカリ替古を  
 々々を召出は古ハ乙名余享和改元カ今年も尚北  
 行わは至る首長事少聞く今年も尚北  
 夷地は至る首長事少聞く今年も尚北  
 シヤ残れりといふ事少聞く今年も尚北  
 案するに前ハ所ヤ由りて少ありこるまらシヤハ

段長  
九  
社  
文  
合  
成



シトキノ圖



シトキノ云ふら女夷首よりけ妝ふ器なり古物間々  
 存して銀あるをの又ハ古代蔀繪のものも有りこれ  
 を懸れば神靈其身を守護し給ひ又禮を正すの具な  
 るよしシトキノの語意を考ふるよしとハ至といへる  
 語よかるひとキを尊の略訛ならんか  
 イナホとは幣帛の心よて神よ奉るなり夷地よ布  
 帛紙等無き故よ木を削りかけよして幣よか由る木  
 邦太古よはかくせよと見へて正月十五日削り花を  
 かくれも其遺製あるへし穠穂の語よん御初穂と  
 云も同意なりいなると云ふ木よて作る處もあり又  
 柳よても作る種よ製しやうあり葬祭の時ハ逆木を  
 以て作るなり





敬禮

敬禮

敬禮は、各々列坐して先づ遙かに其貴人に向ひ合  
 掌して掌を志む摺合せ次第に手をひらき左右揃  
 えす我額のあたりまでさへけ其貴客をいたへき上  
 るやうにありさして手を返し甲を向ふはに額髪の  
 ほとりよりそろく撫おろすごとく了了髪末の  
 至り了警蹕の聲を發す是の如く三次あり了止る其  
 禮状いりにも寛やかなり

ウリ、と云と親子兄弟族友年久しく對面の絶よ  
 者に會たるおり圖の如く禮を為し次は老たる者よ  
 り若きもの、頭兩耳の上を兩手をたささむやう  
 ありそまよりそろくと撫おろし肩より手先きに













至るまで圖の如くいよくさみて漸く顔を合す次に  
 雙方膝をすり寄せ肩の上に顔を入れ合せ只さめ  
 くと涙を流しやゝありて立退ぞき互の安否を問ひ  
 何くきとある云も一聞も一するあり  
 女夷の禮はことよ薄し對する人を兩手よて抱くや  
 うよあし次よ右の食指をもて我鼻の下を撫多やう  
 よ三度あし又袖よて撫るあり

マチコル

マチコルは婚禮の事なり其親々の意よ任せ嬰兒の  
 ころとり言名付置もあり亦壯年よ及んて嫁を迎へ  
 聲を取りもあり種々の寶を女の家へ贈りて結納と爲



マチコル





あり貴賤より多寡と品物に差異あるも凡そ太  
 刀一口を貯ねは大抵妻は持るると云へる風俗あり  
 彼の言なつけ置く者の女兒成長れば其女の家に  
 至りいつとなく妻合して海漁山獵の事を勵み其利  
 を舅の家よりつづくにも非ざ我父母の助けよとせま  
 皆銘々かせぎよして世を渉るあり壯年よして婦  
 人を迎ふるよハ媒人のうしろよかくして舅の家よ  
 行き舅姑も知らぬ懸ありたも媒人をひそかに其婦  
 人を召つきて夜分彼の家に忍びやうに入り家内の者  
 も知らば夫も見ぬふりをして時節のもの語りふど  
 して居るまに聲の傍らに置き歸るなりそと故郷入  
 聲取りの夜は燈火もかきおりに爐の火も燃ぬやうに

するを心得とけ彼の嫉める者ふと立了火を焚ま  
 して何ん時に來りーや家内の者もあらざるを上首  
 尾とははさるひるり其後よく夫よほうへて眞實を  
 つくすを本務と為すメノコの常言に云ふ夫を常に  
 爐にあたらせをき帯解きひろげ了一生を暮させた  
 一と願ふと其心を己といふよとくくきて夫よハ  
 樂をさせた一とさり又妾多くかへつ置を妻の手が  
 らとして嫉妬の心無く妻妾睦く家業に怠り無く  
 遂よハ豪富とある者多一と云ふ其強務勤順賞嘆す  
 るり堪たり

飲酒の禮

飲酒の禮は殊よ嚴重なり先つ文席を敷き客相對し



飲酒の禮





タフカリ





て兩人の中央より行器酒を斟ふ柄盃盤を置き飲箸と  
盃上より置き客の數より隨ひ酒器の設け多し先づ主人  
盃盤を取り上げ酒を酌み客より一搦す次は客掌をす  
り合せ警蹕の聲を客と共に發せ次は飲箸を客より授  
けて次は盃盤を傳ふきは左りの手の甲を蒸し一撫  
し一搦し酒盃盤を受取り彼の飲箸より酒盃の上  
をゆきうた左右へ拂ひ飲箸の先より酒をすくい火  
神水神諸靈神に至りて供し畢りて一搦すれを主  
人警蹕の聲を發し掌をとり合せ次は客飲箸より鼻  
の下鬚をかき揚げ盃を臺ふら飲む半を飲り一搦  
すれば主人前の如く禮を為し飲終れば又盛る都て  
酒ハ柄抄より汲むを禮といは鋤子を用ゆこと無し

タフカリ

タフカリ一曰くりムセ又曰くりホ、舞踊の事なり  
處々より大同小異あり其形ち鳥の翻飛する形ちを  
うつしたる舞と見ゆ酒宴の時客より盃をとり先即座  
より立了舞ふ事ありこま古饗應の意残れるなり

ウカリ替古

ウカリと云ふ事を時々替古せり蝦夷人常より三尺餘  
りの槌を製して皆家の内より掛置き夷人相集りて皮  
或ハ薦の類を背に負ひ打合て手練とるなりとよ  
り文字無きゆへ喧嘩口論等致し負たる方よりわび  
證文の代りに所持する寶物を遣はし和解とる償ひ  
と為するり賊を為し女を犯すの罪も亦同一其罪の



輕重よりて遺り物數種あり又寶物を出さざりて  
 ウカリをせんといふ時ハ雙方の親戚相集りて先づ  
 罪を犯したる者を彼の榧にて三度打ち次は相手の  
 者も打ち互にうとまふ安全なれば償を出さぬに及ぶ  
 其強弱よりて只一打にて倒さ死するものあり  
 又半死の病者と為るもあり此術は練達の者ハ幾度  
 うたるとも強りなやむ者無し是故は平生誓古  
 て身を固むる事をつとむるなり  
 ウカリする時ハ雙方の親族相集りて式の如く三度  
 打ち婦女も笹の葉の枝は水を灌き打るゝそのよふ  
 りかけくべウタキ揚て補助するなりへウタキと  
 時々の聲を揚ることなり

ウカリ誓古の一

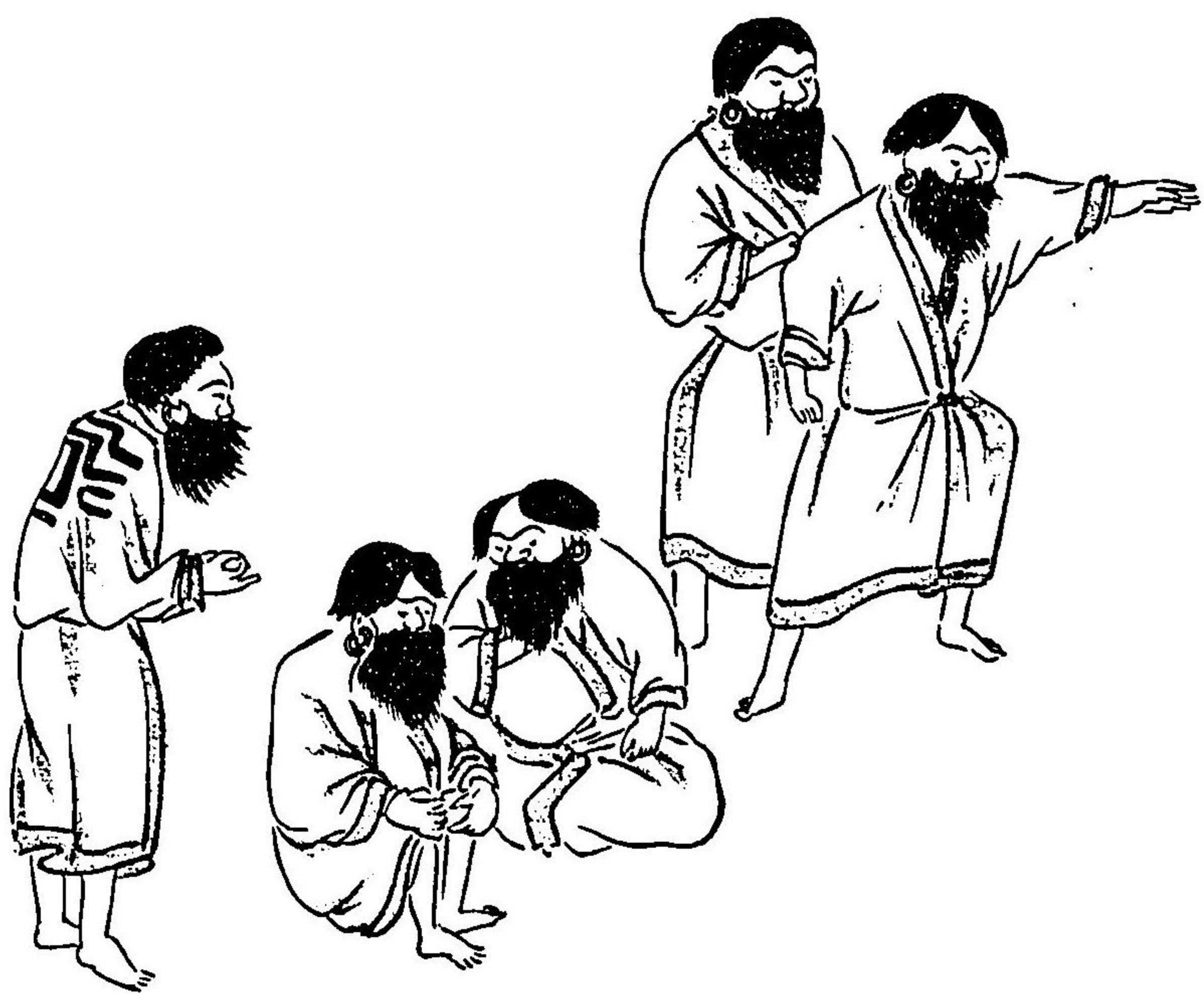




其二



五





其三

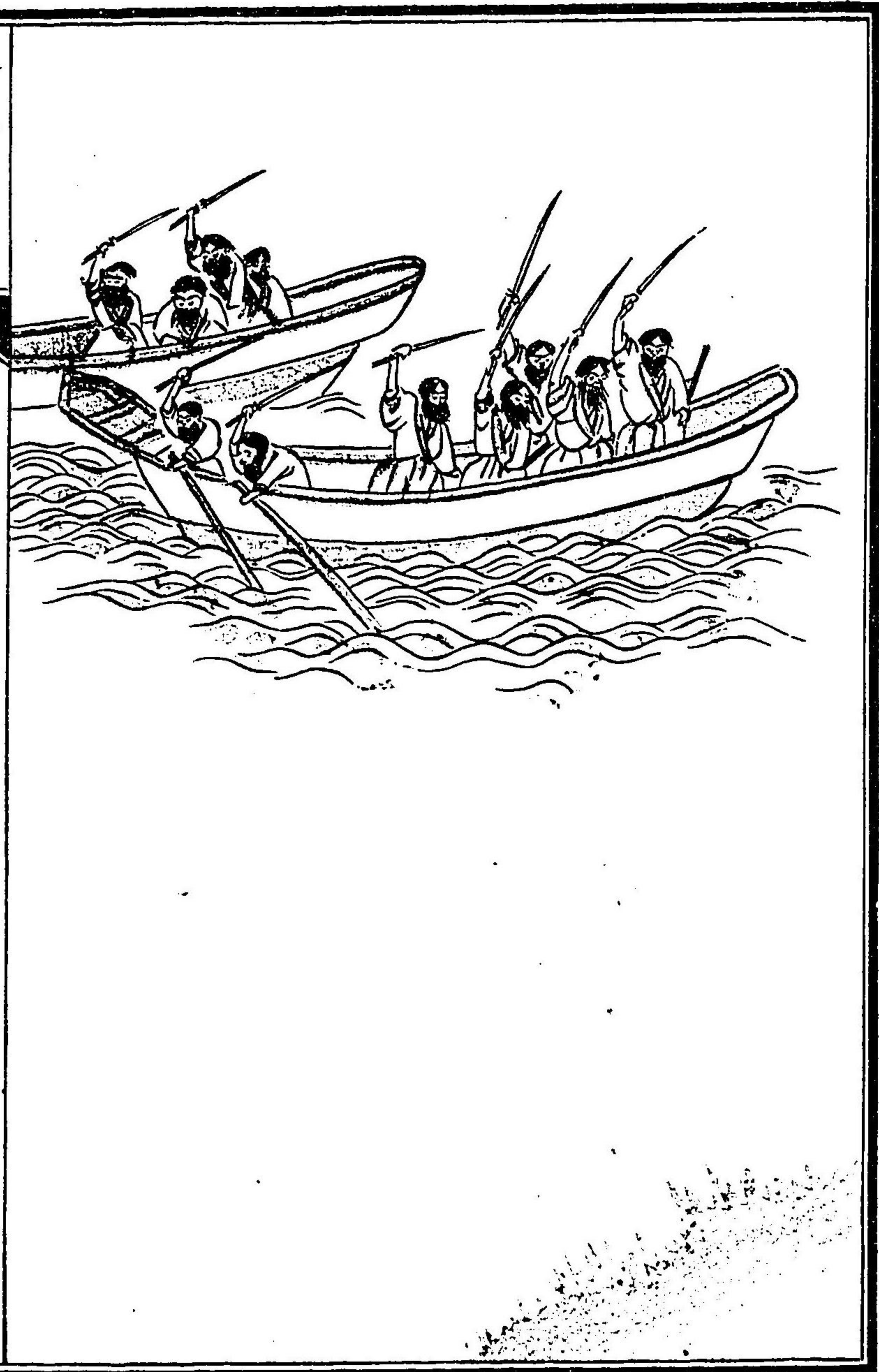




二ヨエン



鬼ヶ島



三 島嶼合戦



ニヨエン

ニヨエン一曰くケウエムシウこまは酋長遠境に到り海陸とも歸る時に行ふなり先づ海上に歸舟見ゆまば其處の老若男女太刀鎧の類を抜き女ハベウタキあげ其あまきよ呼る聲一里もきこゆといへり男もかけ聲揚げホーイ〜と叫び渚をあな〜となとへ歩行し船の方へ懸ひを添ひ船よりこまを見たり太刀鎧等を抜きかけ聲を上げ〜船を進め又二三度漕廻せは陸の者もぐるり〜とまこり凡一二町引退そき其間船をつらぎ聲々太刀ふりかざし進み行く向ふよりも追々來合せて刀鎧棒あど打合せ聲を揚て左右に別る其間徒僕どもハ席を

設け置き各々坐よつき禮式の如くま〜互に安全を

語り

鼓カ

西夷の地はある五絃の琴俗は蝦夷三ハ長さ四尺なり東夷の地はハ絶て無一曲三十餘あり唄も己に絶へ曲ぞかり傳をまきり調子ハ平調一二絃三五絃同調四絃一段上り左右の食指よて鼓をこくと圖の如く曲名 足高蜘蛛音 造高嶋音 軍三河音 温泉造音 大山落水音 鯨神鯨戦争音 造島神 山神列

此外傳ふる者あねど畧す



鼓力圖



鼓力圖  
卷上  
繪文拾遺

冒木

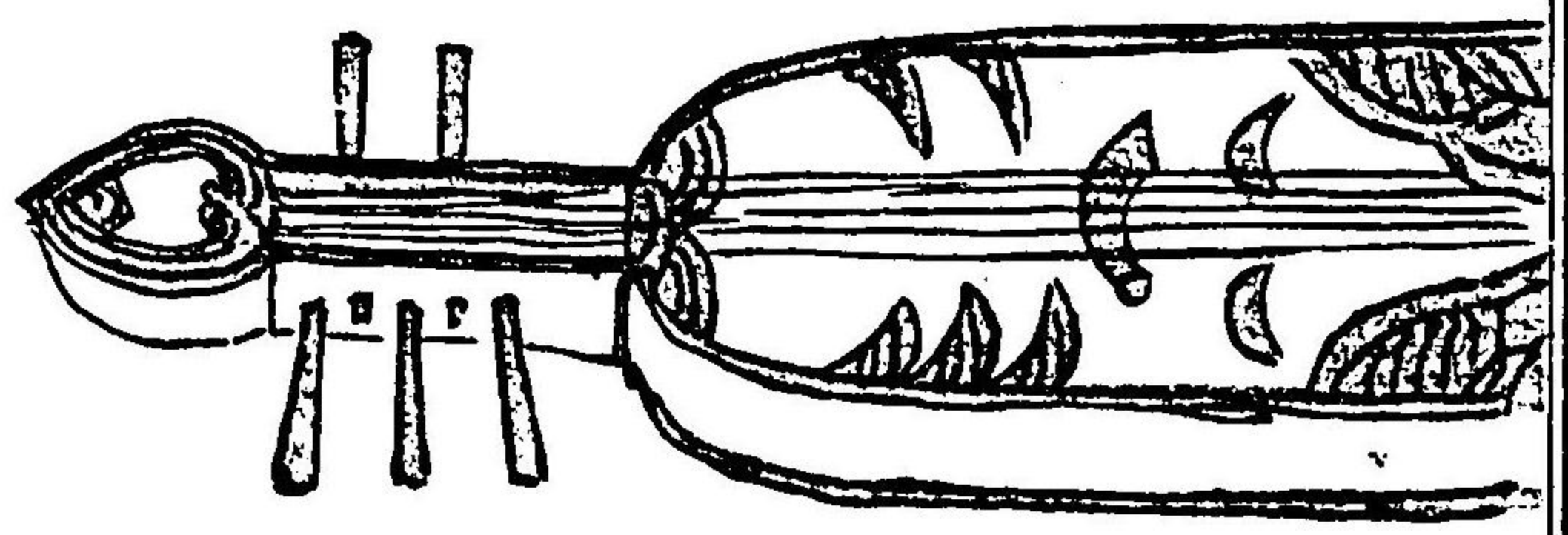
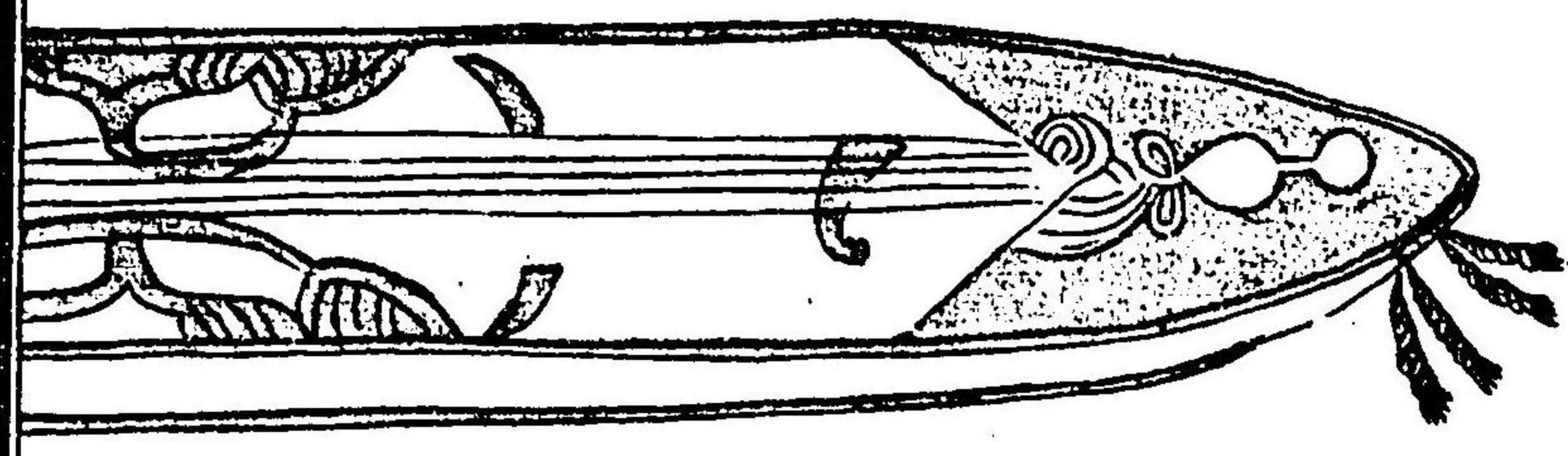


モセキナ

長身草  
卷上  
二十五  
繪文拾遺



カりき寫しん真ま圖の圖





モセキナ

葦麻の類より了方並線を取て弦と為す

眉木

眉木本邦のあら、木あり葉相對したるを眉と見て名付たると見ゆ訛してラルマコと云ふ松前箱館の土俗等ヲシコの木云ふ按むに拐の木か異國人此木を見て西を指し是伽羅木なりと云へり初當り枝を案スルニ伽羅ハ梵語香水ナリ此木、枝葉相似タル者歟、異人誤認シテ伽羅ト言ヘルナリ、又欄字ヲ書シテアラ、木ト云フ欄ハ蘭ト同シ木蘭ハ則木蓮ナリ本草香水ノ部ニ出ツ、飛彈位、山、此水ヲ出ス、貴紳ノ笏ト為ス、故ニ位山ト云フ、曾我耐

軒幽討餘録ニ南方草木疏ヲ引テ云ク水松似檜而細長、蓋此也然ラハ則チ水松ト稱スル者ナル

サイモン

サイモンと云事を行へり婦人ふと密淫或ハ隱惡等の名あり時ハ其有無を争論して後神を誓ひ熱湯を灌く或ハ湯中ニ小石三つ入き、これを探り取り一ひ隱惡無き者ハ手依然として腐爛せむと云ふ故ニ婦人女ハ手腐爛して生涯廢人となる者ありサイモンの語ハ神を奉むる祭文の義か或ハ截問の訛言歟日本紀應神天皇九年。武内宿禰與弟甘美内宿禰争是非難決。勅祭神祇于磯城川上。令二人探湯。甘美内



サイモン





近蝦夷地居家

粟稗の糠を家のうしろに捨る所を  
定の置けり都て禾類ハ神の製一た  
り人物故糠又至るまで鹿略るまよ  
神坐を設け木幣を捧く本邦人あや  
すつく穢どもハ償を取らざるなり



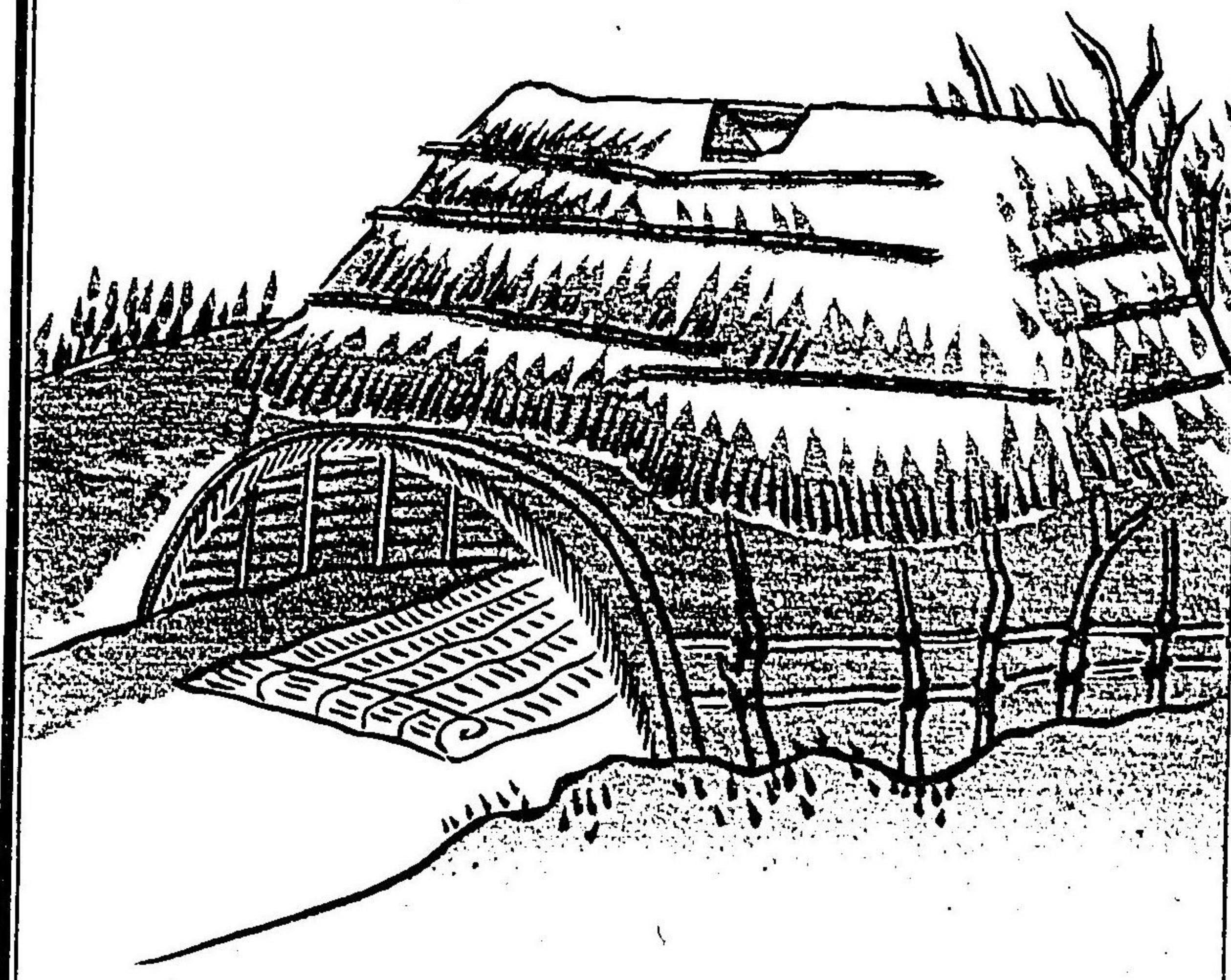
千セは舎屋の名るり形を方ニ  
造營す間尺の定めまく尋敷を  
用いむ太古神ハ尋の殿を作り  
たりハ古意なるべし出入の戸ハ  
一處破風口より明りを取れり近  
夷地ハ窓もあり又入口ハ圖の如  
家邊ニ垣の如く木幣を立た  
る所ありスシヤと云ふこれ神  
座とて祀り時々獲たる獸の  
頭を奉ず



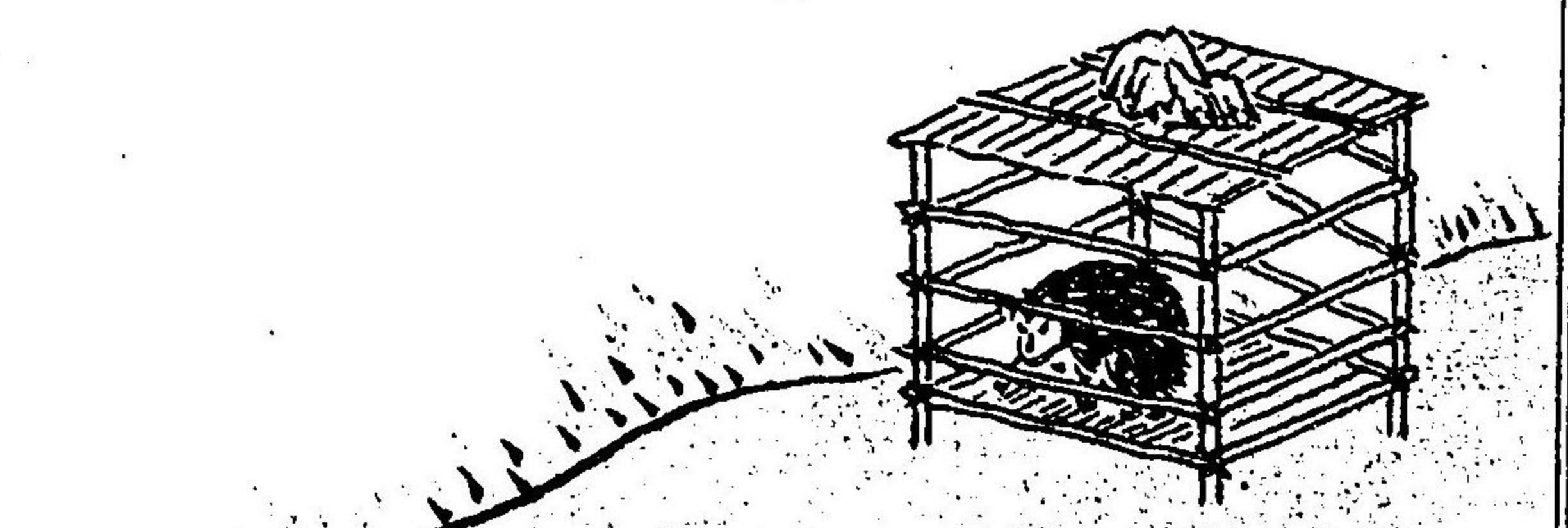


西夷居家圖

笹の葉よて屋根  
をふき棟よ室あり  
神靈を祀り木幣も  
木を植て其木よ結  
付けて立てり



畜熊



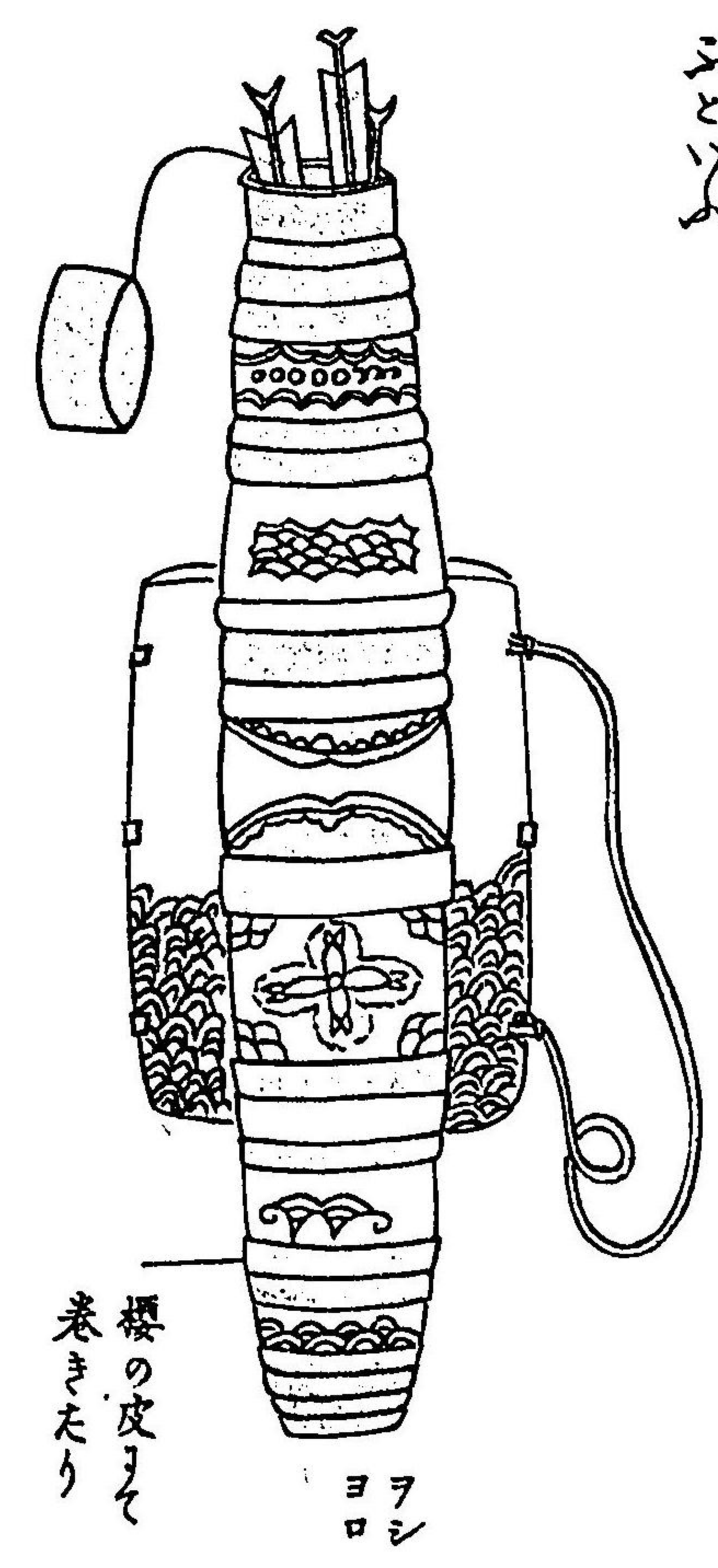






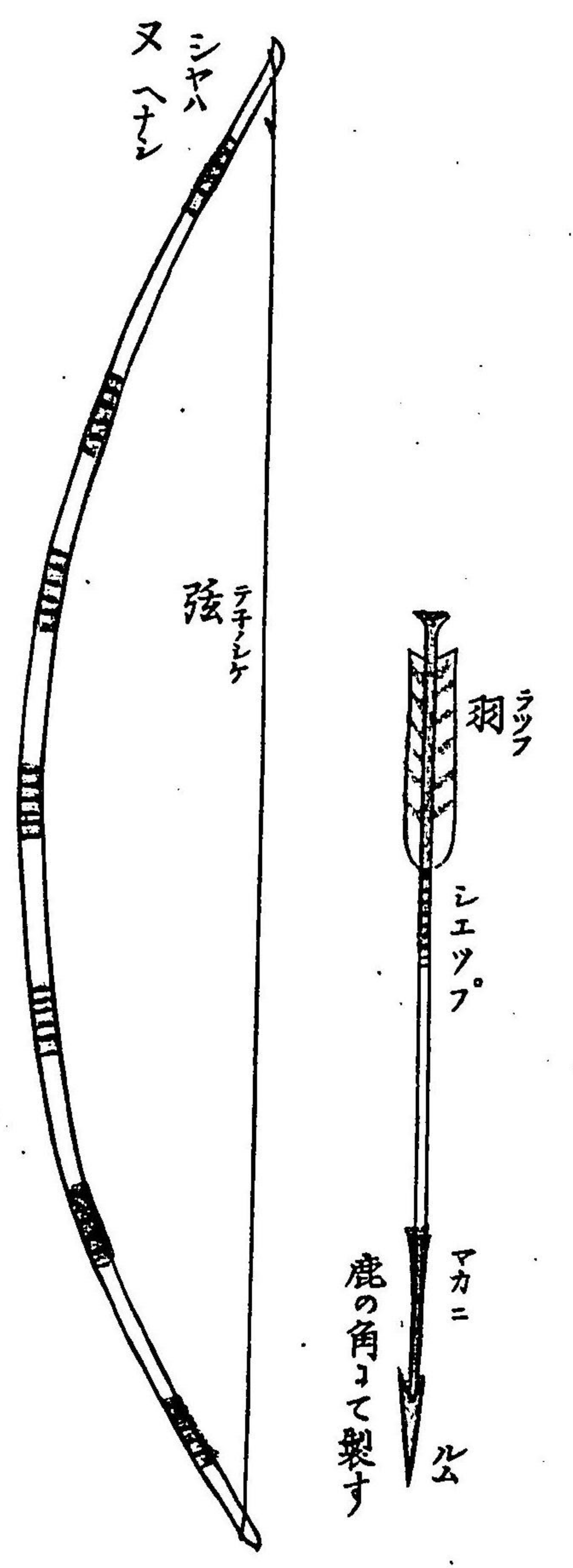
弓矢鞆圖  
鞆を婦人の寶器と稱す

鉄テツはくまハクマ笹ササのととを以て製す鳥頭トリカビを鳩爛トビぬりて魚イサ獸ケモノの肉中に射イこめば忽タち覺トると云ふカラフトより製を傳ふと云ふ



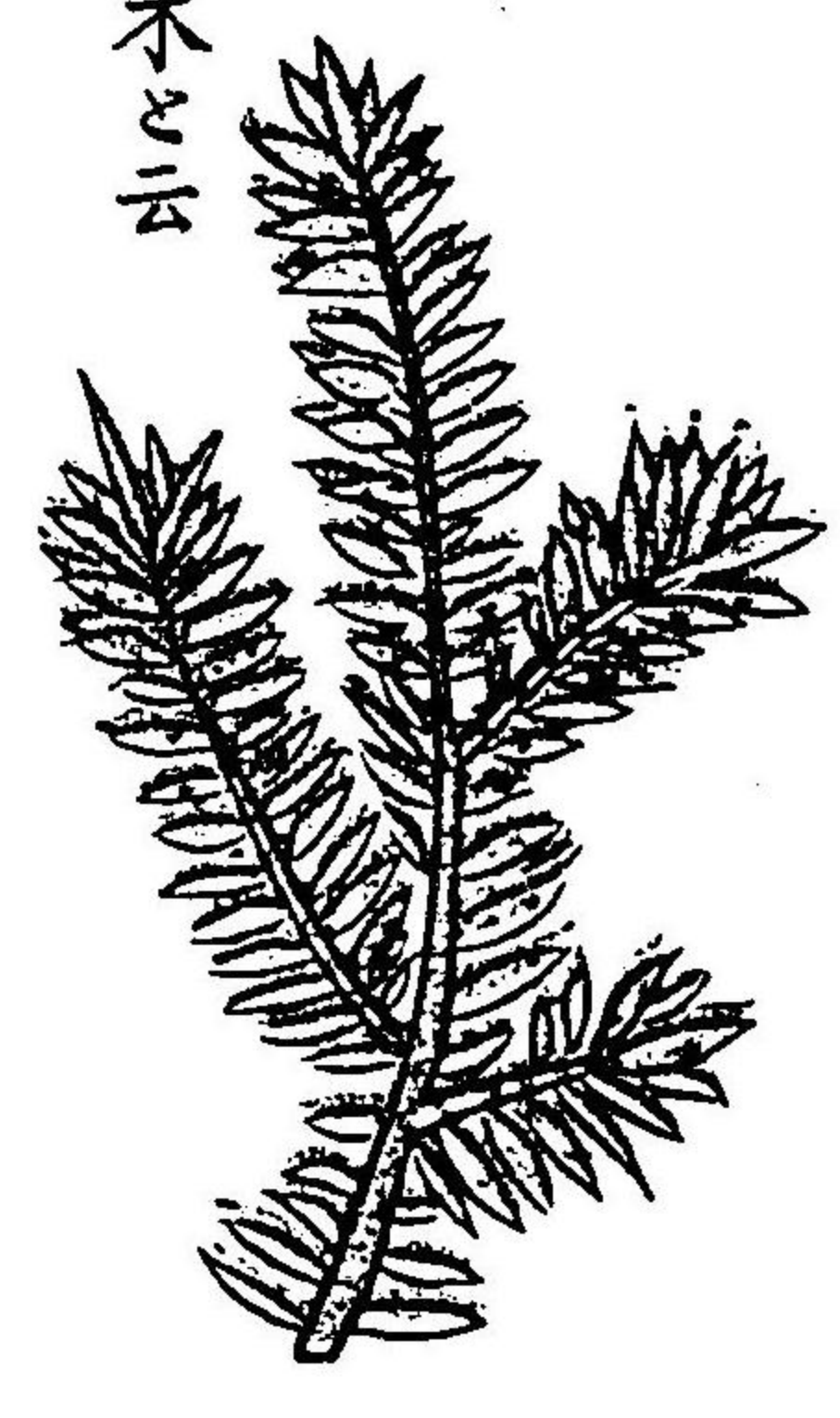
櫻の皮サクラノカより巻きたり

ヨシ



鹿の角カより製す

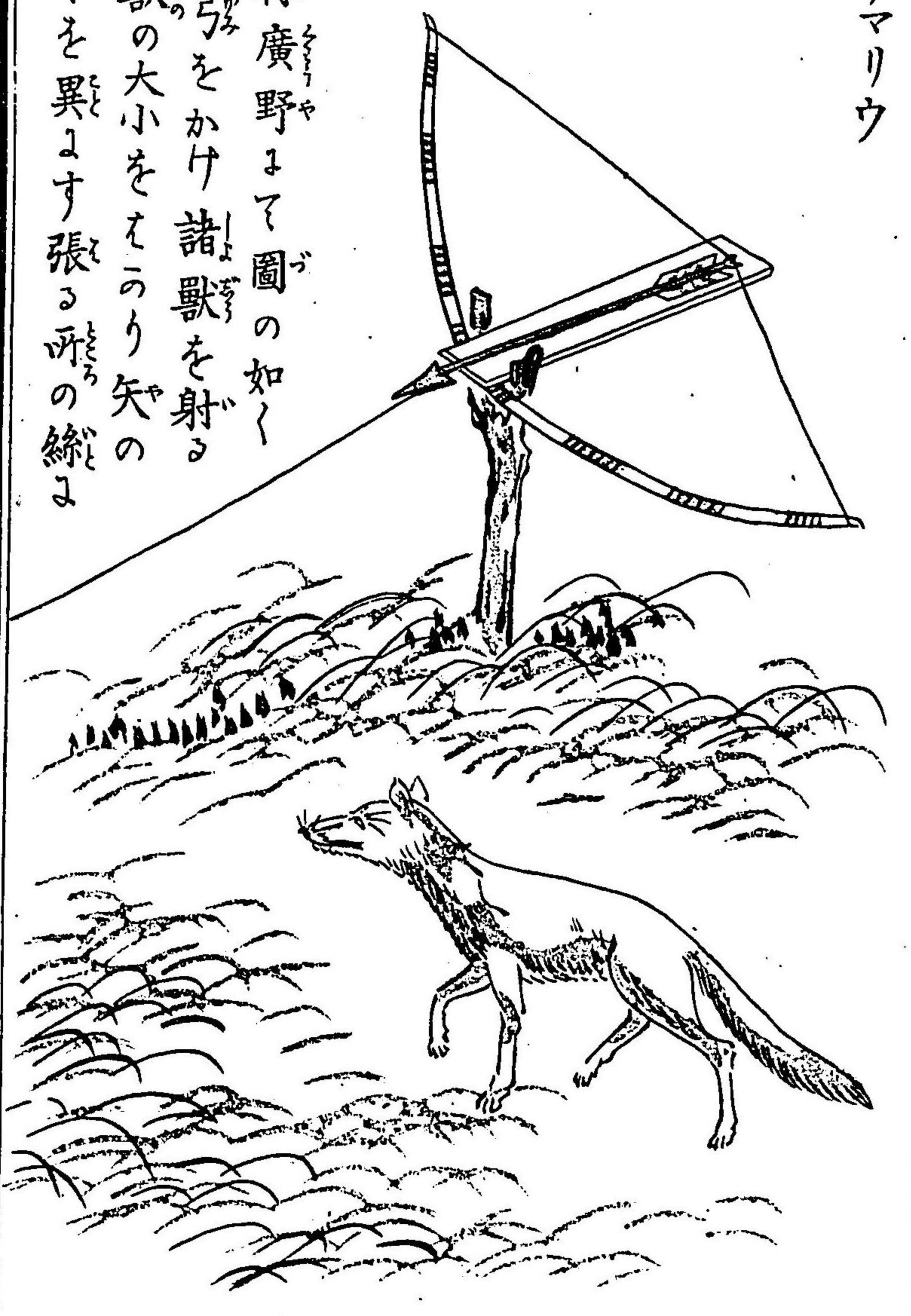
夷名ウラマウルマ箱館近在マシコノ木と云ふ  
飛驒國トビよてハ一位イの木と云一名アラノ木





アマリウ

山林廣野にて圖の如く  
るる弓を掛け諸獸を射る  
其獸の大小をそのり矢の  
高さを異す張る所の絲よ



さこれば毒矢飛來りて獸よ  
中り斃るるなり アマとい置る  
事ありリウとい弓の名あり

アマリウを掛置く所よハ  
木よ木帯を立てて人のあた  
らざりやうよさるる一とれ





蝦夷の事 巻上 蝦夷文合

手爛武内無傷 蝦夷人探湯の事此遺風を傳ふも  
の歟

袖中抄よ

顯昭公

あまのやまの蝦夷のほくろも毒のきりあはれなき  
毒氣の矢といはくろのえびすの鳥のと法のくま  
は附子といふ毒をぬり甲のあさるをするりと  
いはといふ 附子知と云は是なり

蝦夷みやげ巻上終

187  
2  
98



187  
2  
98

海身夏也計

下



蝦夷みやげ

原名蝦夷奇観下

温肺臍之部



マンベの海に温肺臍を出せり冬十月

頃まで夷に命じて捕へし此漁事を

をテバ蝦夷と云ふ其頃に至りて物忌

を清め木幣を製し酒を捧けて海神舟

方名ウ子ヲと稱す雌をホーマツプと

云へり大三四尺餘一種ヲ子ツプと云ふあり大五

尺計り或ハ六七尺及ふ者あり二種とも牙あり

て上も支齒より下ハ特齒なり常に波に浮ぶ西

地ヲコシリは出る者ハ尾齧少異る者あり空に



蝦夷みやげ

奇観

海神



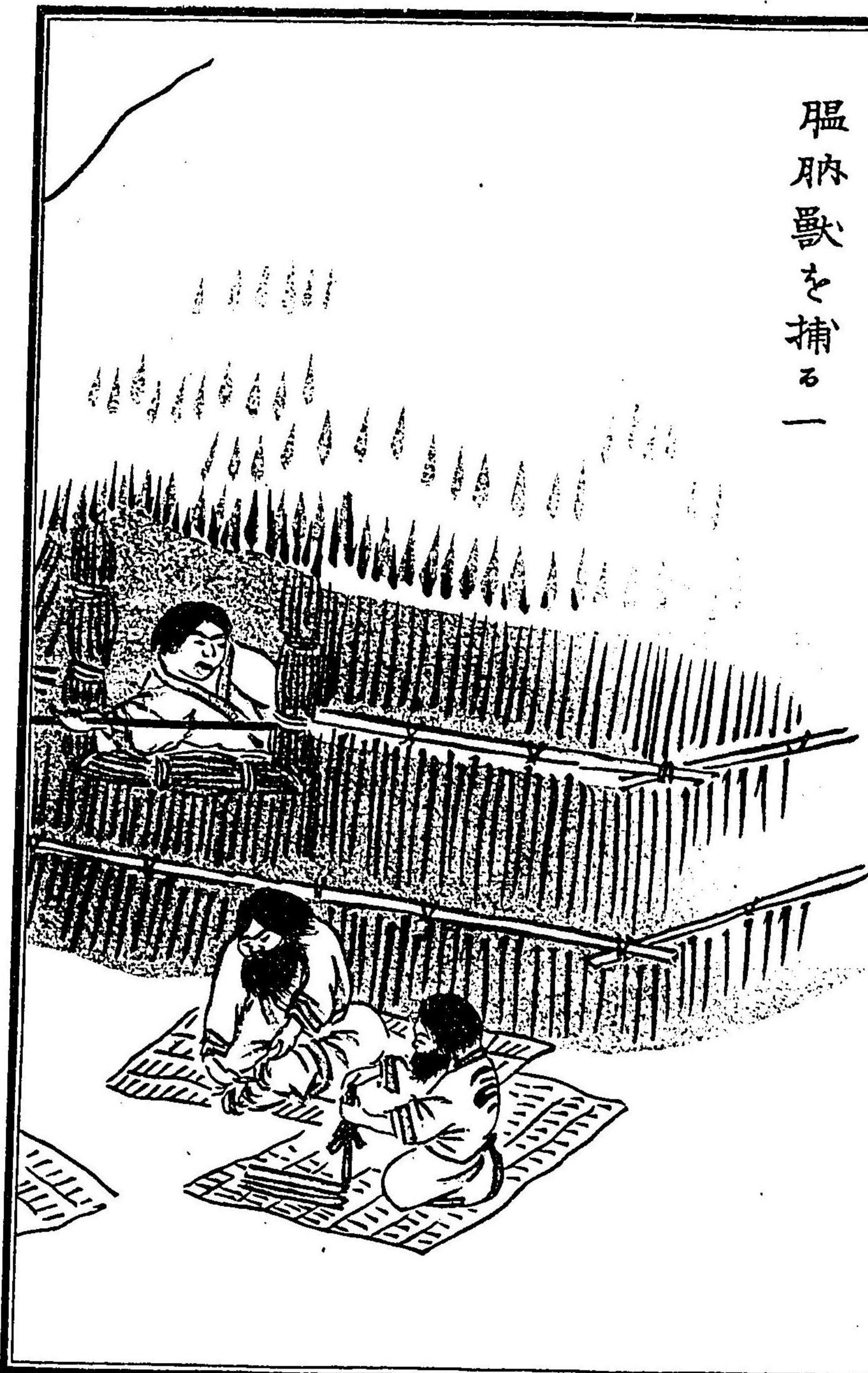
たやらのに波静かまは日をうかひて漁獵し出づ其  
 あとよては物音を禁じ家より居る婦女等食事さへい  
 そろにせさまむ彼のウ子ヲを驚かして眼をさほす  
 せむ捕獲して歸れば窓より入る其外漁具の出入  
 れも窓よりせざれむ護がとと云ふらハせり

ウ子ヲ水上に游泳  
 する状圖の如く夷  
 等此状を見ても  
 眠と為す





温胎獸を捕る一

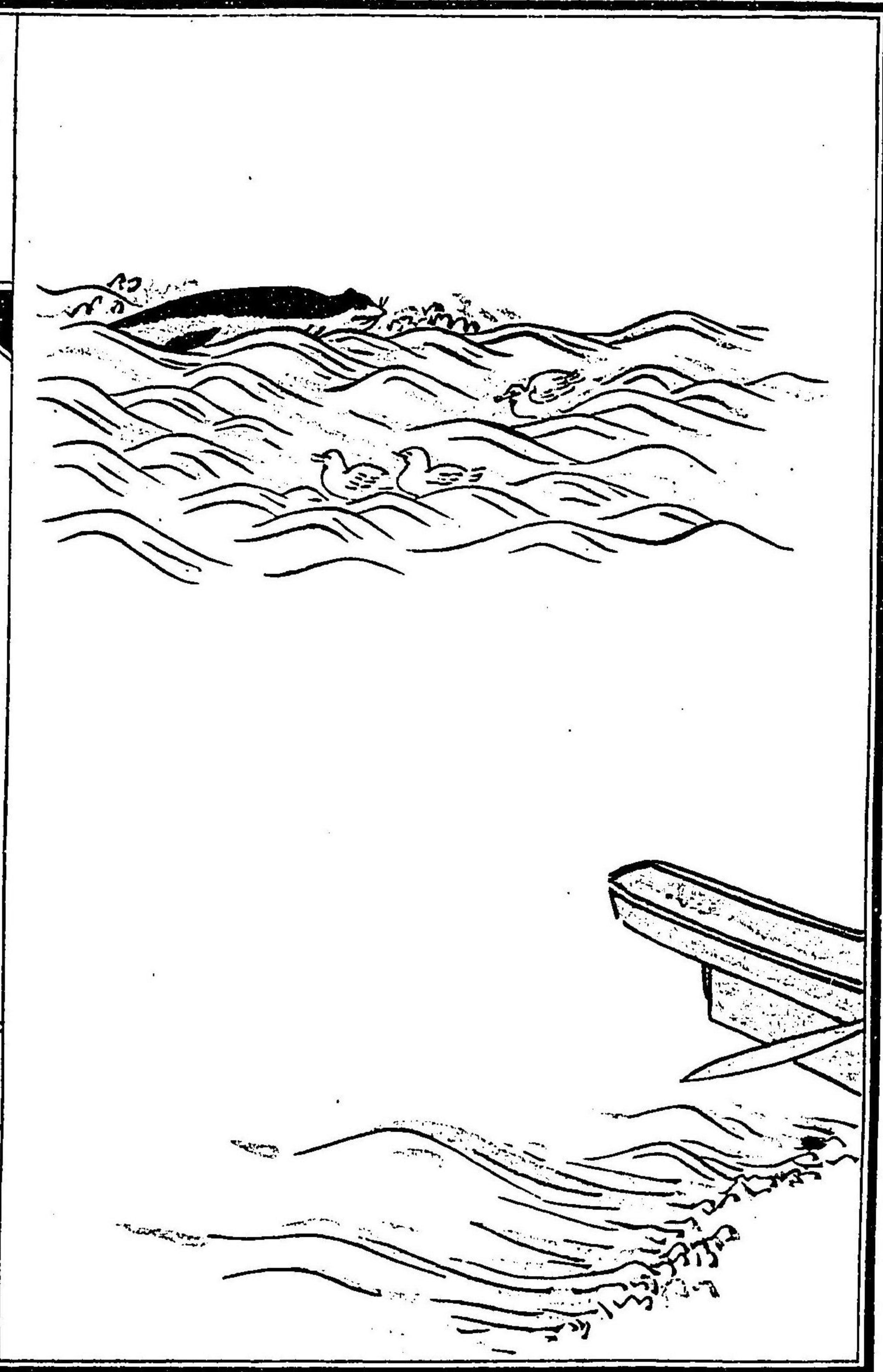
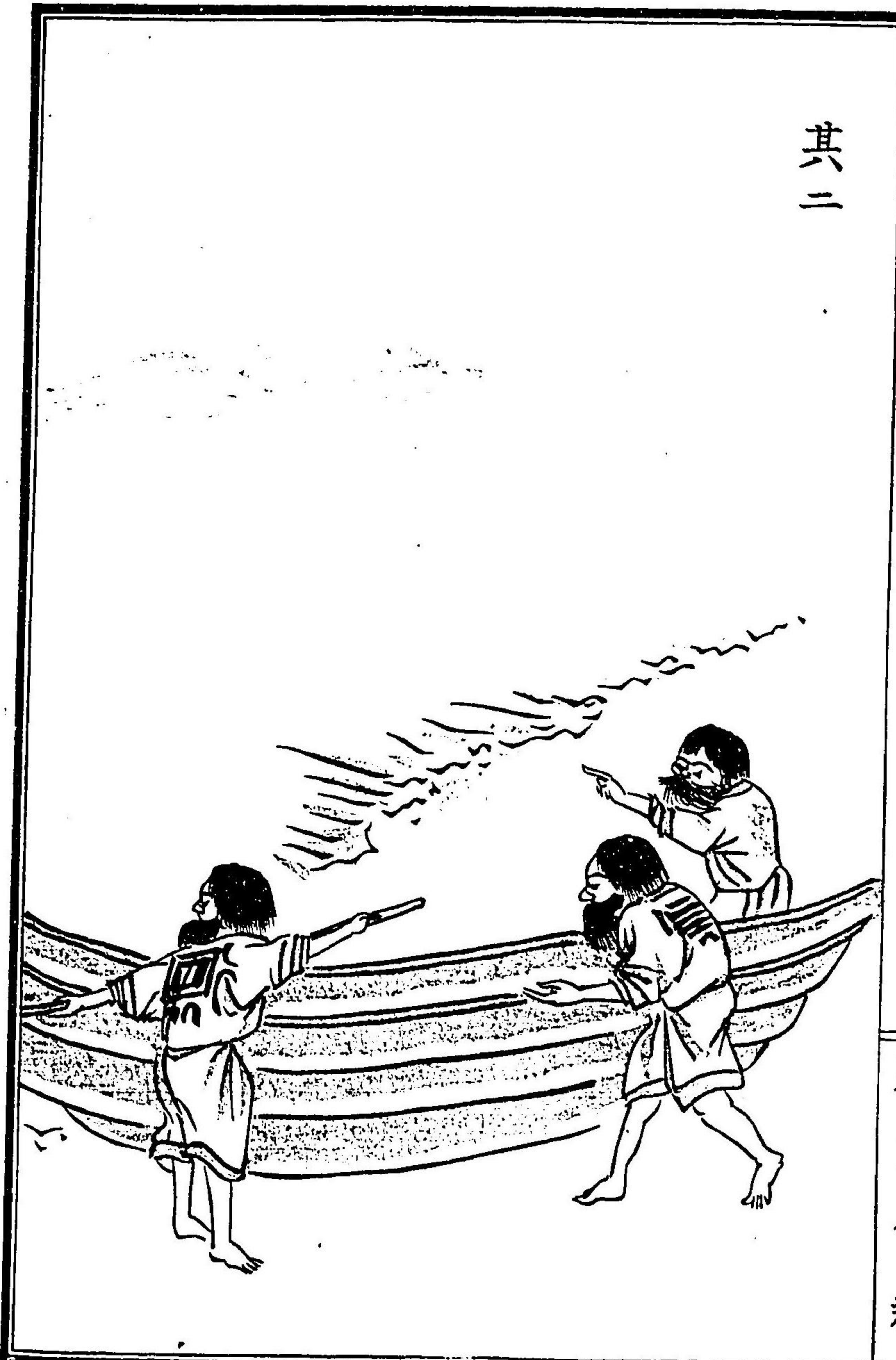


鬼文舎藏





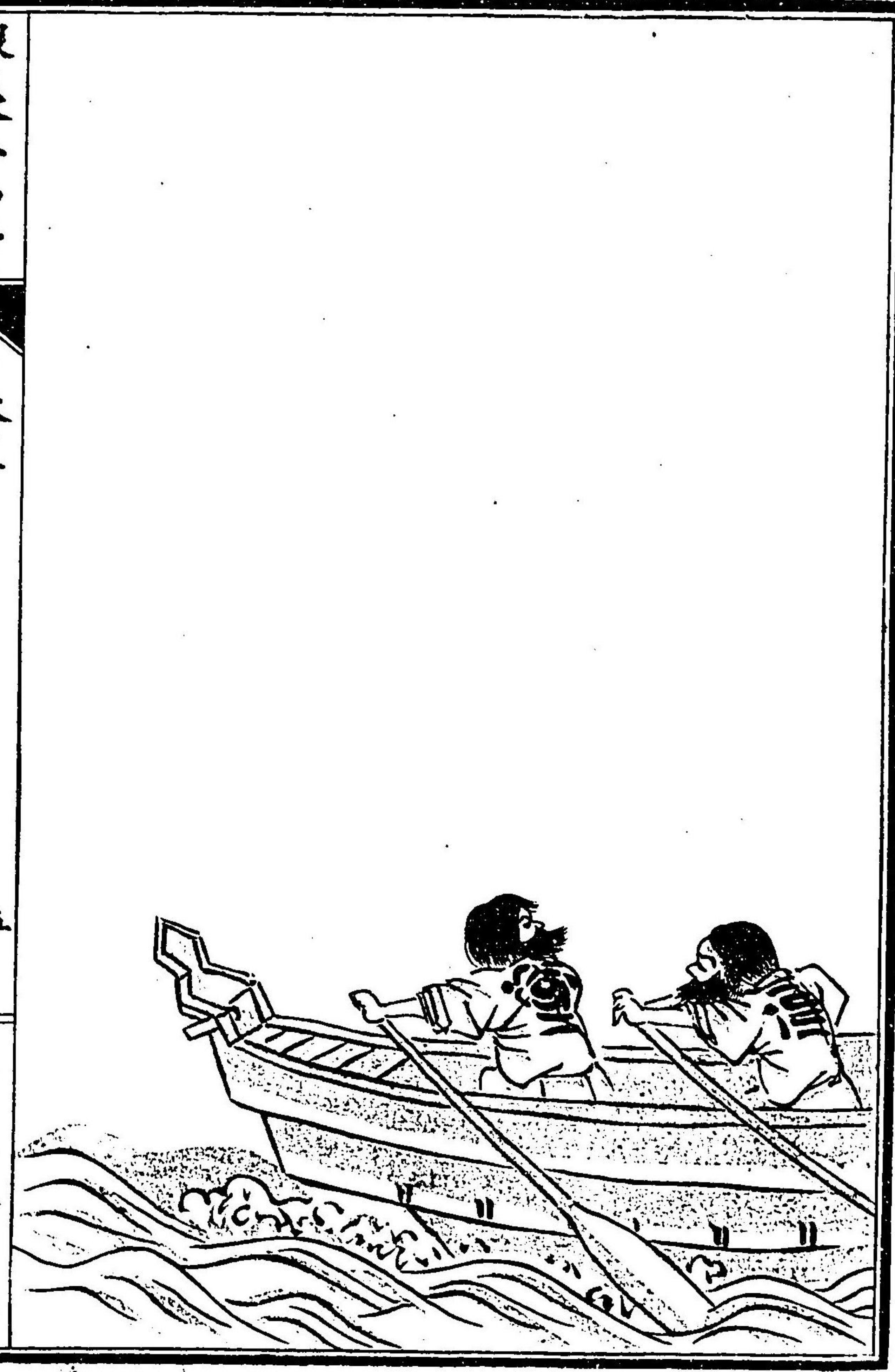
其二



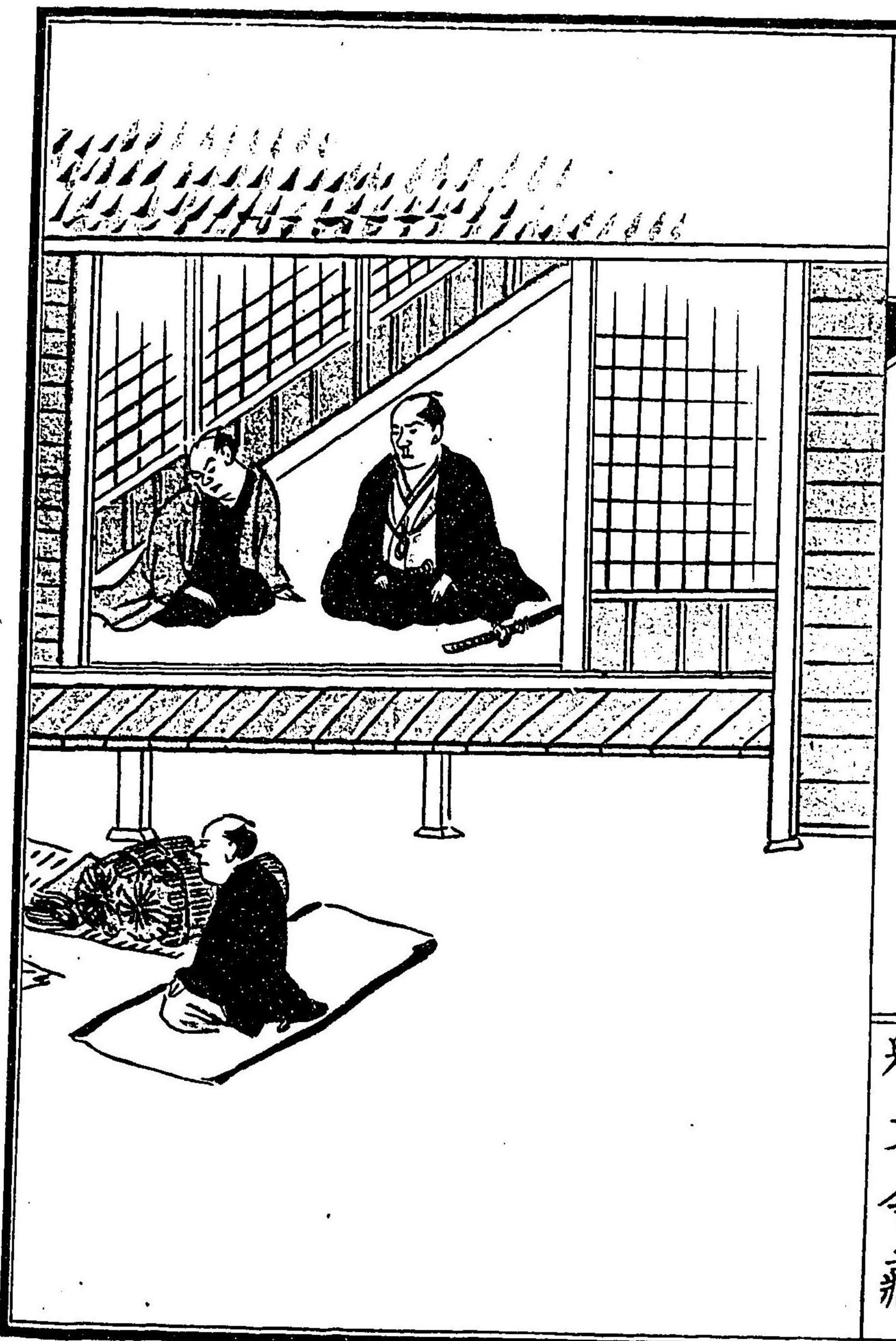


獣の波に浮ふ時ハ  
 其傍に必ぞ鳧の  
 如き鳥群れり夷人  
 其鳥を見て舟を  
 徐かに漕よせ其間  
 十間計り隔て魚を  
 掬を以て擲ち捕る

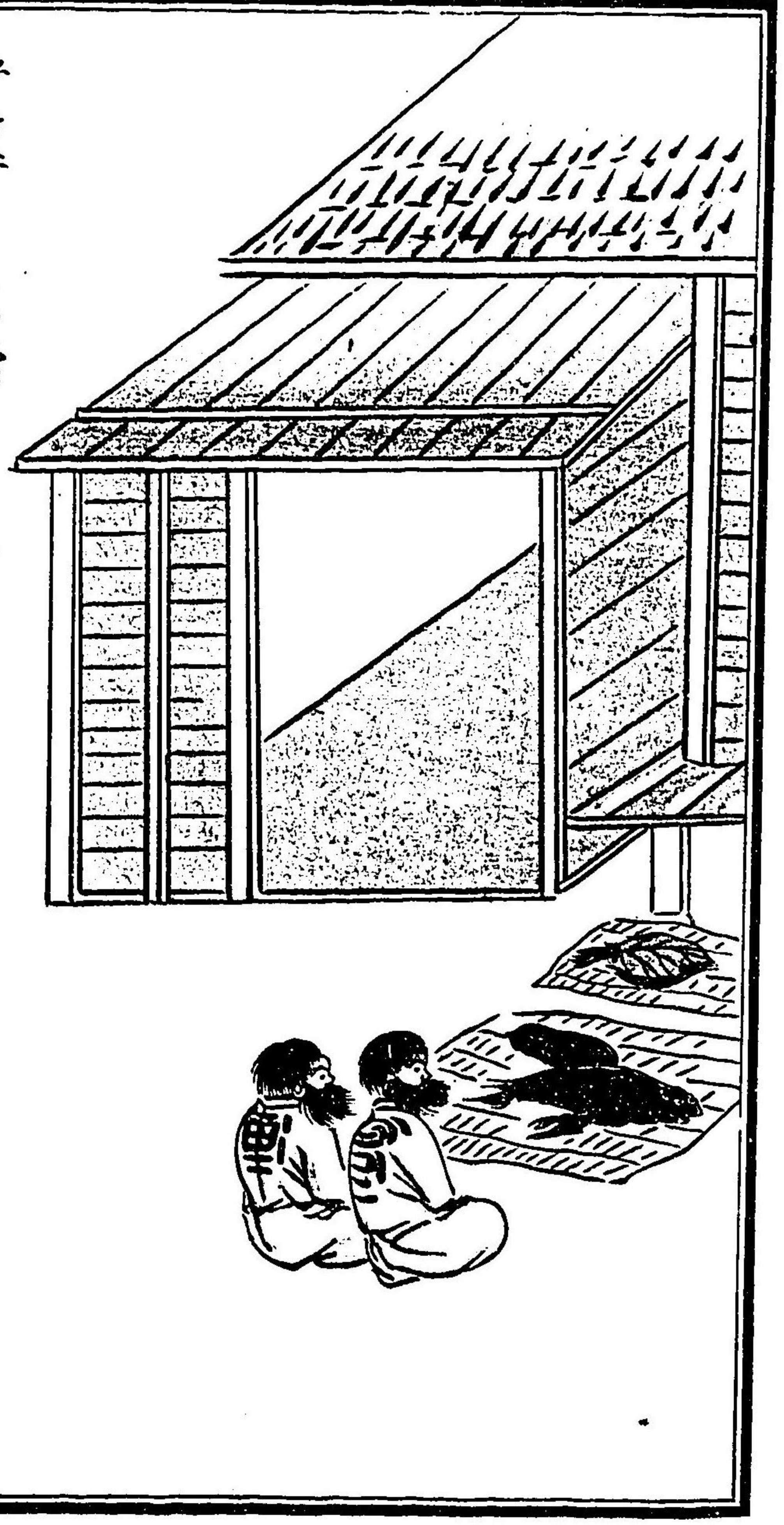
其三





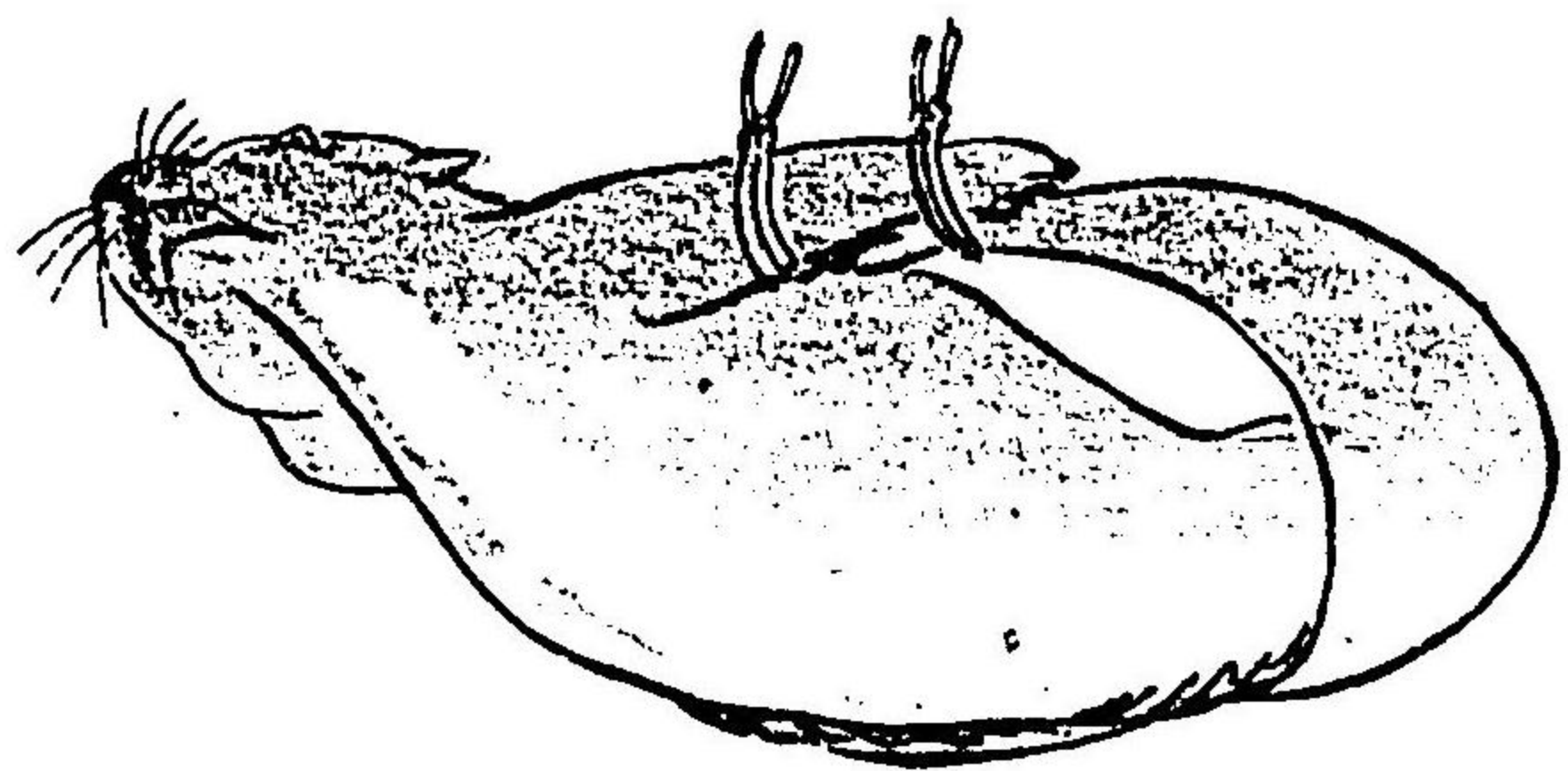


獲來り會所へさー出せば米衣服  
煙草等成あふるあり



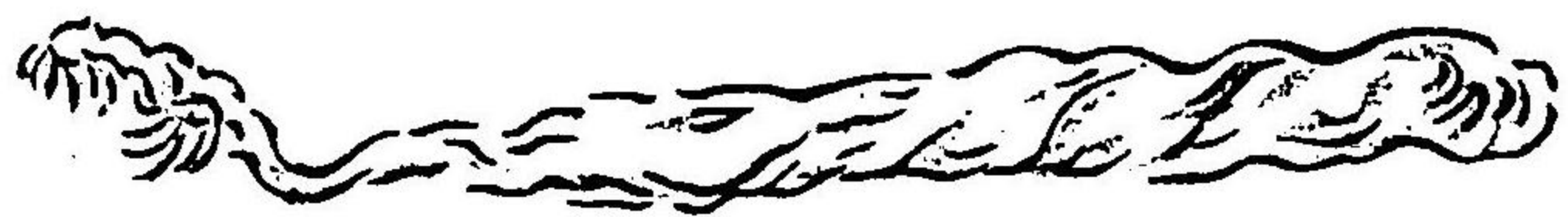


鹽漬とるたる圖



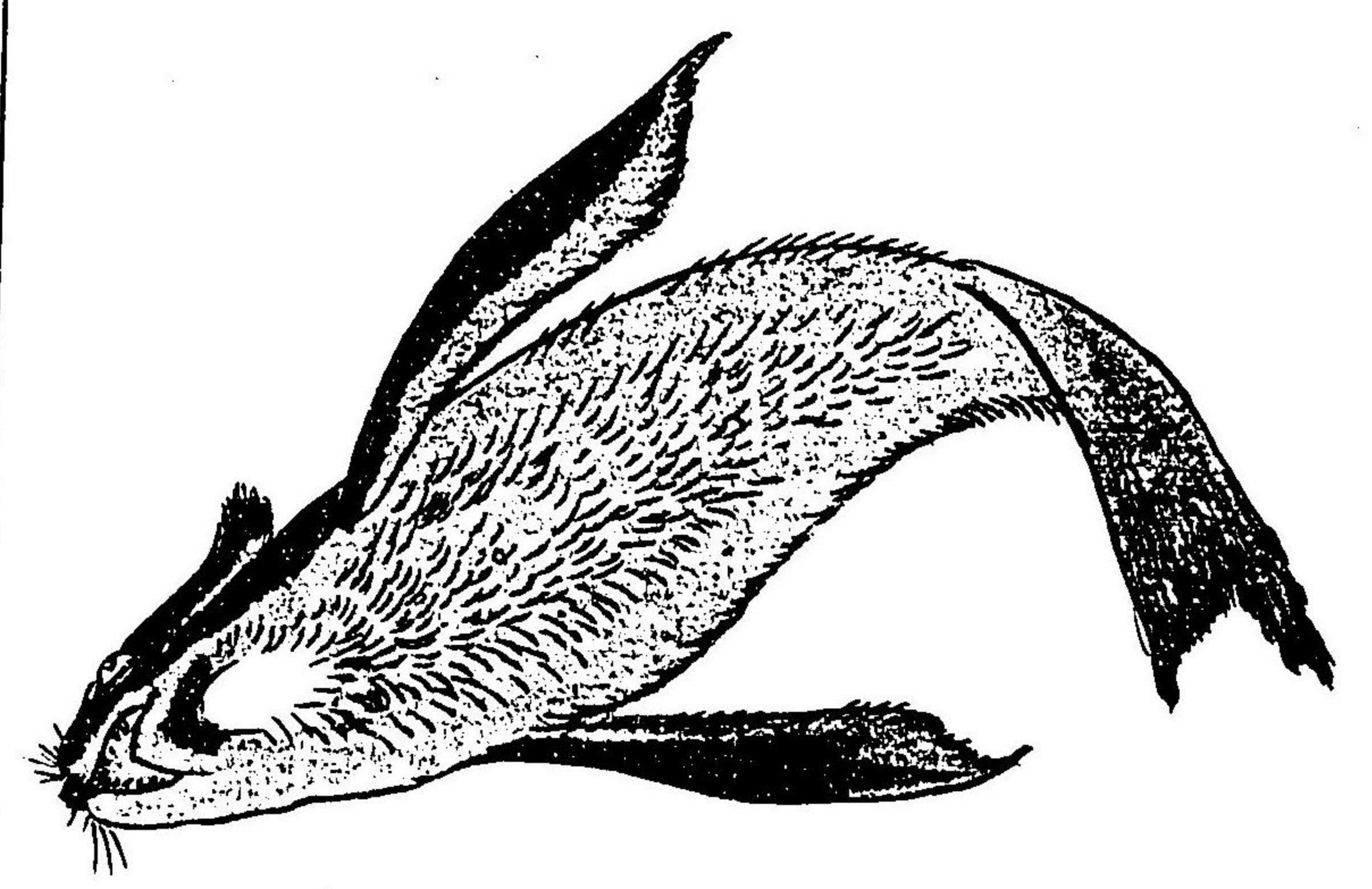
海狗腎 鹹大熱無毒

本草。修治。用酒浸一日。  
紙裹炙香。剉搗。或於銀  
器中。以酒煎熟。合藥。  
時珍曰。以漢椒樟腦同收。  
則不壞。  
主治。治男子宿癥氣塊積冷勞氣  
腎精衰損多色成勞瘦粹。





ヲ、子ツブ  
西地ヲコシリ多ク  
此獸を産す

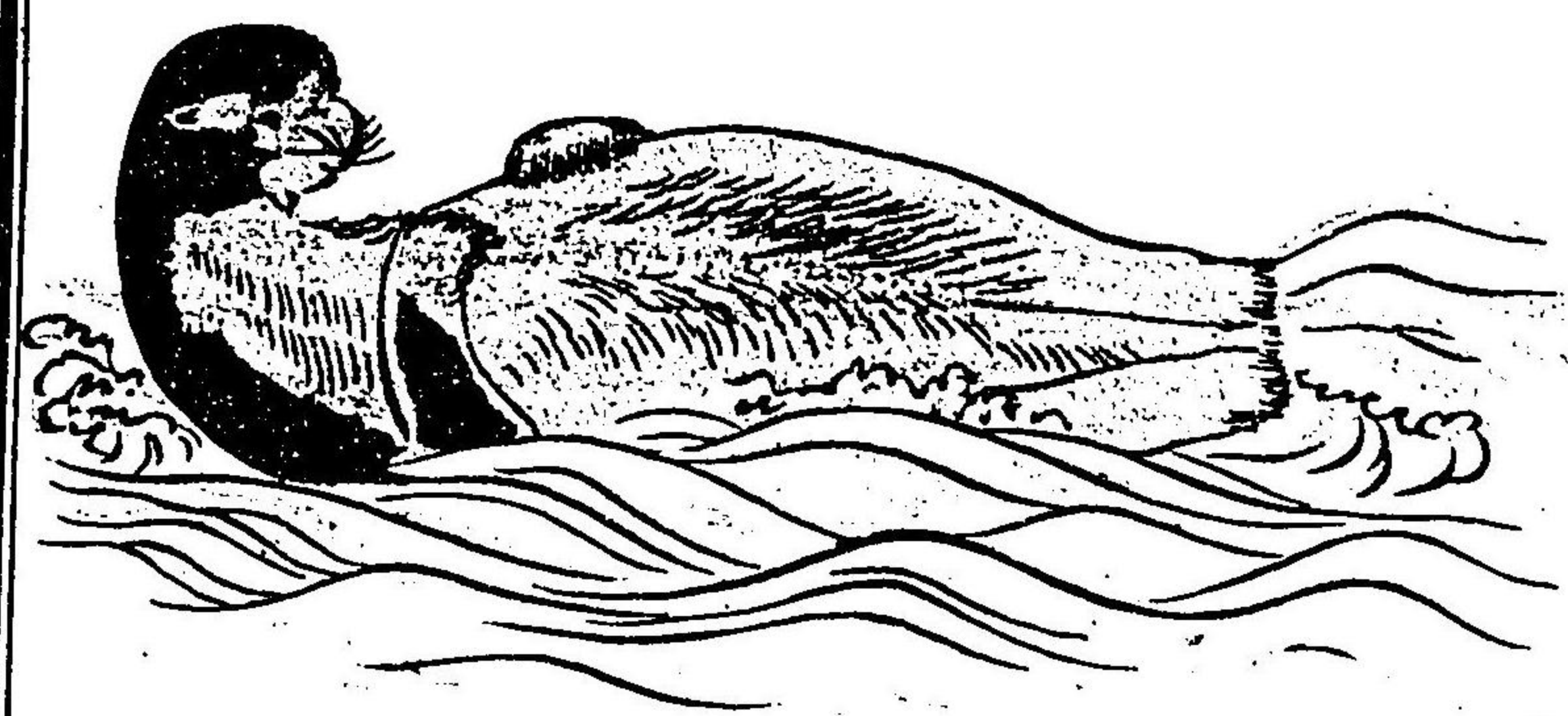


本草。脛肭臍。多偽者。海中有獸。號曰水鳥龍。海人取其  
腎。以充脛肭臍。其物自別。真者有一對。則兩重。薄皮。覆  
丸核。其皮上自有肉黃色。一穴三莖。收之。器中。年々温  
潤。如新。或置睡夫頭上。其忽驚跳。若狂者。為真也。  
時珍曰。按唐書云。骨蝟獸出遼西營州及結骨國。一統  
志云。脛肭臍出女直及三佛齊國。獸似狐。脚高如犬。走  
如飛。取其腎。漬油。名脛肭臍。觀之。則似狐。之說非無也。  
蓋似狐似鹿者。其毛色爾。似狗者。其足形也。似魚者。其  
尾形也。入藥用外腎。而曰臍者。連臍取之也。亦異物志  
豹獸出朝鮮。似狸。蒼黑色。無前兩足。能捕鼠。郭璞曰。晉  
時召陵扶夷縣獲一獸。似狗豹文。有角兩脚。據此。則豹  
有水陸二種。而藏器所謂似狐長尾者。其此類與。



ウルツプ一名ラエトロフ島より東北  
 二十里あり最上常矩始めて渡り  
 地圖を製せりエトロフ島クナジリ  
 キイタツプ邊の夷人初復より此島  
 へ渡りラツコを獲る大ヤ六七尺毛  
 厚く從横上下のわらわら色紫  
 黒く一敷皮の絶品とす

獵虎海上に浮む時ハ腹をうへへ  
 して游泳せり又島山も遊べり



イヨマンテ

イヨマンテ一日イヨ是夷地の大祭事にして熊を殺  
 して神を祀るなり初春より深山の雪路に入り飼馴た  
 る犬又熊の糞居す所を探らしめ其子を獲て巴家  
 婦をして乳を呑しめ育つ或ハ籠に入れ置魚肉をあ  
 へて養ふもあり十月頃に至れば稍長くと頗る巨  
 大なる乃ち日をとり酒食を設け親族朋友を饗  
 す是を賓客造といふ其日熊は種々の食物をあへ皆  
 言ふ神ハ今日ヲマンテなり能く食したまへと祝言  
 して衆夷籠を免ぐり踊りを為す削りかけの幣を  
 垣の如く並べ文席を敷き熊を出す育つた家婦こ  
 れを為すが古例なり衆まに籠といへども窮ハ厭ふ



木幣を製する圖





イヨシンテ





其時衆夷の中一人熊の兩耳を執て背に跨り三五人立より首を繩三條を結付けあなごころと心のまゝよくうひ遊むせ稍あつて酋長傍らに在り了山の方より向ひ矢を一發一カモイシノヲマンテノウと唱ふ夫より男子ハ嬰兒に至るまで弓矢をもたせ先づ酋長或ハ酋長の長男ハ又ハ飼主の家の子より射初るるり但一鐵を去りて熊の中へまてなり長ハ八尺計りなる木三本を設け置き射事終まは熊を木の上より引き上より木より押へ胴へも横木をかかけ壓し殺さるり白銀造りの太刀を首に當る事あり了双を加へ此時處より米を蔭かけるもあり育了たる婦人と悲泣尤も甚だし

其二





其三





其四



東坡志林

卷一

雜文金瓶



東坡志林

卷一

十四

雜文金瓶



さら殺しつゝ熊を席の中央に置き妝飾したる又シ  
 ヤサンカタ幣をかざる太刀短刀蒔繪したる種々の  
 器を陳らね來夷ハ服を改ため耳環をかけ太刀を帶  
 び酒食を供へ嚴重に禮拜し祝して曰く  
 酋長我神 至今為神 今日送兄  
 再神而來明年 我自執之 今兄敢辭  
 集まる所の男女をれく言ふ事ありて神の出立  
 を祝し太刀を帯ひ耳環をかけいさほさまゝして  
 神酒を吞とむ  
 案とるに祝語の漢譯通ト難き所あり恐らくも轉  
 寫の誤謬あるべし或は原著人の粗漏なるや

熊祭



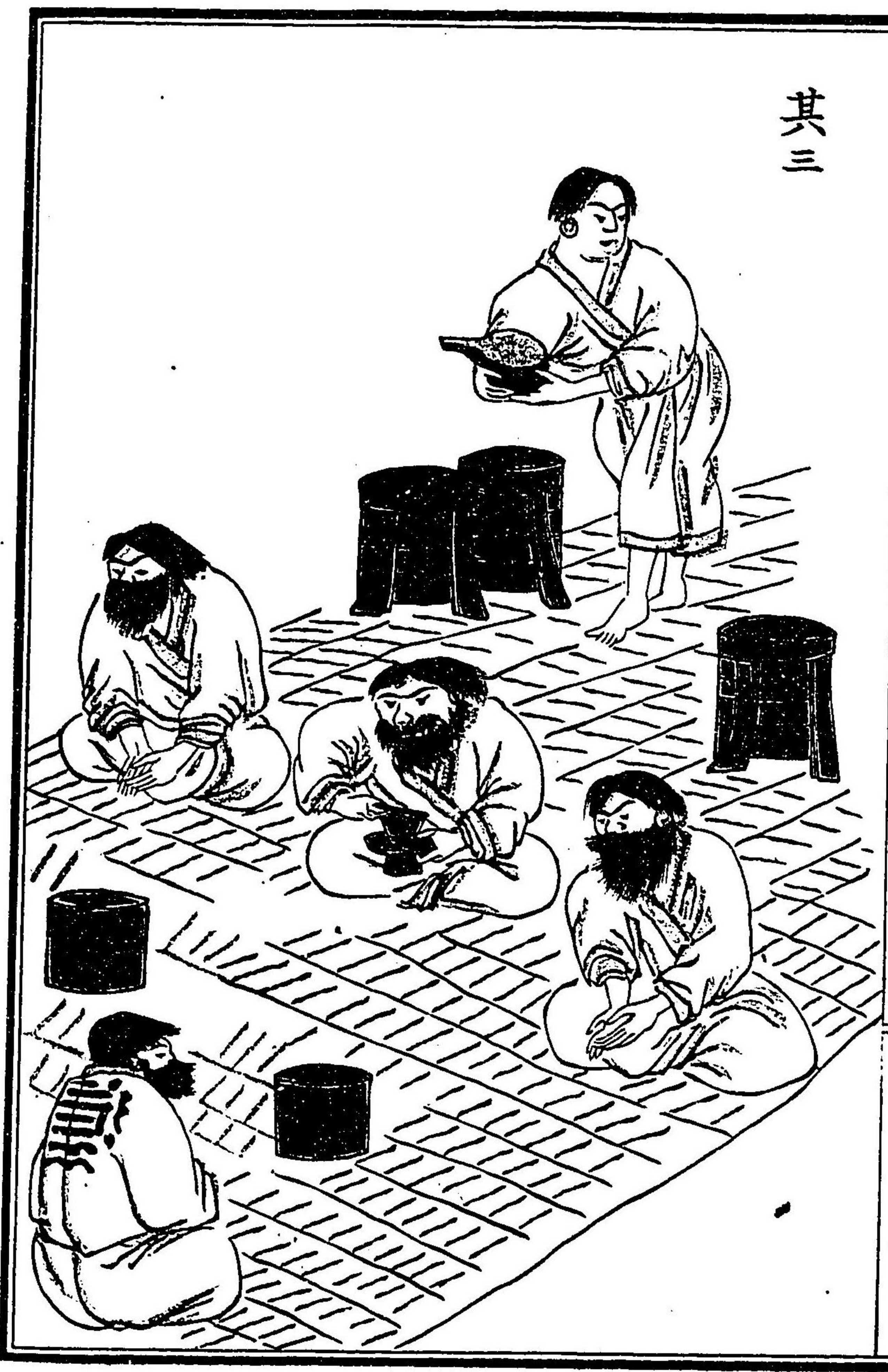


其二





其三





此時ハ支配人番人を賓客として子供從僕の叔まで  
も飽まで酒を飲しめ三五日の間ハ躍りさまく  
る事して樂しむ祭りの翌日ハ熊の皮を剥ぎ肉  
を羹よして食ふ頭も木幣を付了又シヤ又祀り置く  
なり  
又處よ由りても熊を殺し直ちよ皮を剥き頭を解て  
三尺許りなる木を立て彼の皮を着せ全體を作り衣  
服太刀を帶させて酒食を供どもあり又家の中よ  
祀りもあり  
蝦夷島の熊よ數種あり熊と云い羆と云いアルキツ  
フと云ふアルキツフハ羆の長大なるものよ稀よ

深山より出る大丈に至る者あり人を襲せむ甚と害  
を為さばアルキツフハ夷言よ來る器といふ事なり  
蝦夷人と雖ども其肉を食せし是熊中の酋なる者ふ  
り土俗云ふ大木の精化してなる者故に斧よ了伐  
殺して山よ捨て置ば又化して木と成るといふ  
本草集解時珍曰。按白澤圖云。木之精名曰彭侯。狀如黑狗。  
無尾。可烹食。千歲之木。有精。曰賈胛。狀如豚。食之。味如  
狗。相似た事由録す。エトロフ島よ出つ  
同書時珍曰。熊羆魁三種。一類也。如豕色黑者熊也。大  
而色黃白者羆也。小而色黃赤者魁也。建平人呼魁為  
赤熊。陸機謂羆為黃熊。是矣。羆頭長脚高。猛憨多力。能  
拔樹木。虎亦畏之。遇人則人立而攫之。故俗呼為人熊。



關西呼<sub>レ</sub>狼熊。羅願爾雅翼云。熊有<sub>二</sub>豬熊形如<sub>レ</sub>豕有<sub>二</sub>馬熊形如<sub>レ</sub>馬即<sub>レ</sub>羆也。或云羆即熊之雄者。

按す。本草に引どころの諸書。膾炙獸を説く者大同にして小異。真物を見むして傳聞より由て書け。故に正しかりき。説多し。然れども土地の異なるに從つて自から小異有るべし。由て本邦北海道に産する所の膾炙獸及び海驢獵虎等を真寫して附録とす。

○蝦夷地に産する熊ハ羆と二種のみ懸なる者も無し。木精の化せる等の説ハ信するに足るものなり。本草彭侯の條に相似たる説あれば著者引て以てこゝを附す。贅言に似たり。

○附録

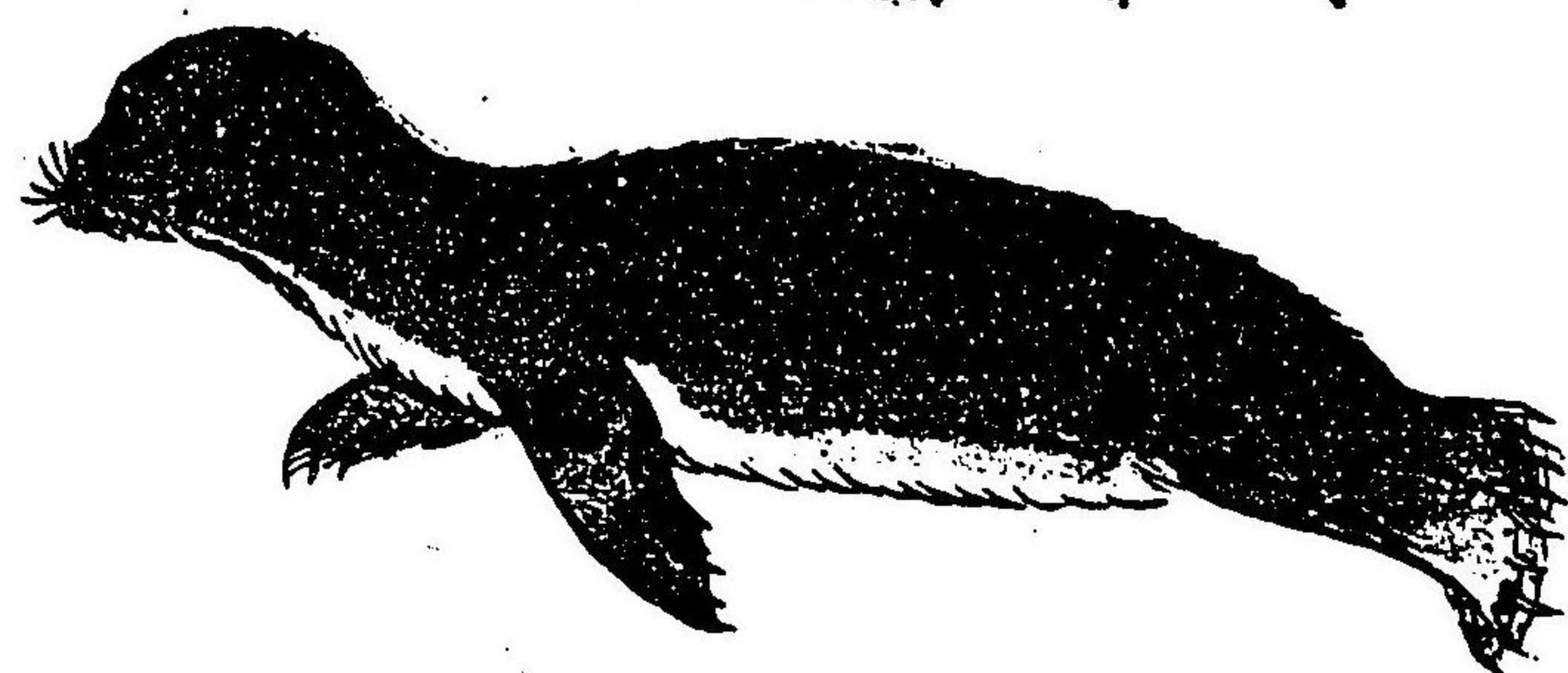
北海産の動物幾百種なるを知らず。其中鮮鱒鯨大口魚の類ハ所より由て大同小異あるも大約四方の運輸して衆の知る所なき。茲に載せば内國諸海に稀し。獵獲する事あるも山村僻邑海邊より遠き地より見ゆる事も稀なる者あり。其奇狀異態ある者を擇んで十の一二を模寫し。童蒙の覽に供せんとす。恨むらくは筆者の拙なるのみならず。墨摺淡彩真に相逼ること能くば。覽客其拙きを笑ふことあると云ふ。

編者誌



おろとすの  
膾  
膂  
臍

三四尺  
五七尺  
色淡黒  
まじり毛  
短



海  
壘

あま  
か

七八尺  
色淡黒  
まじり毛



らつこ  
臘  
虎

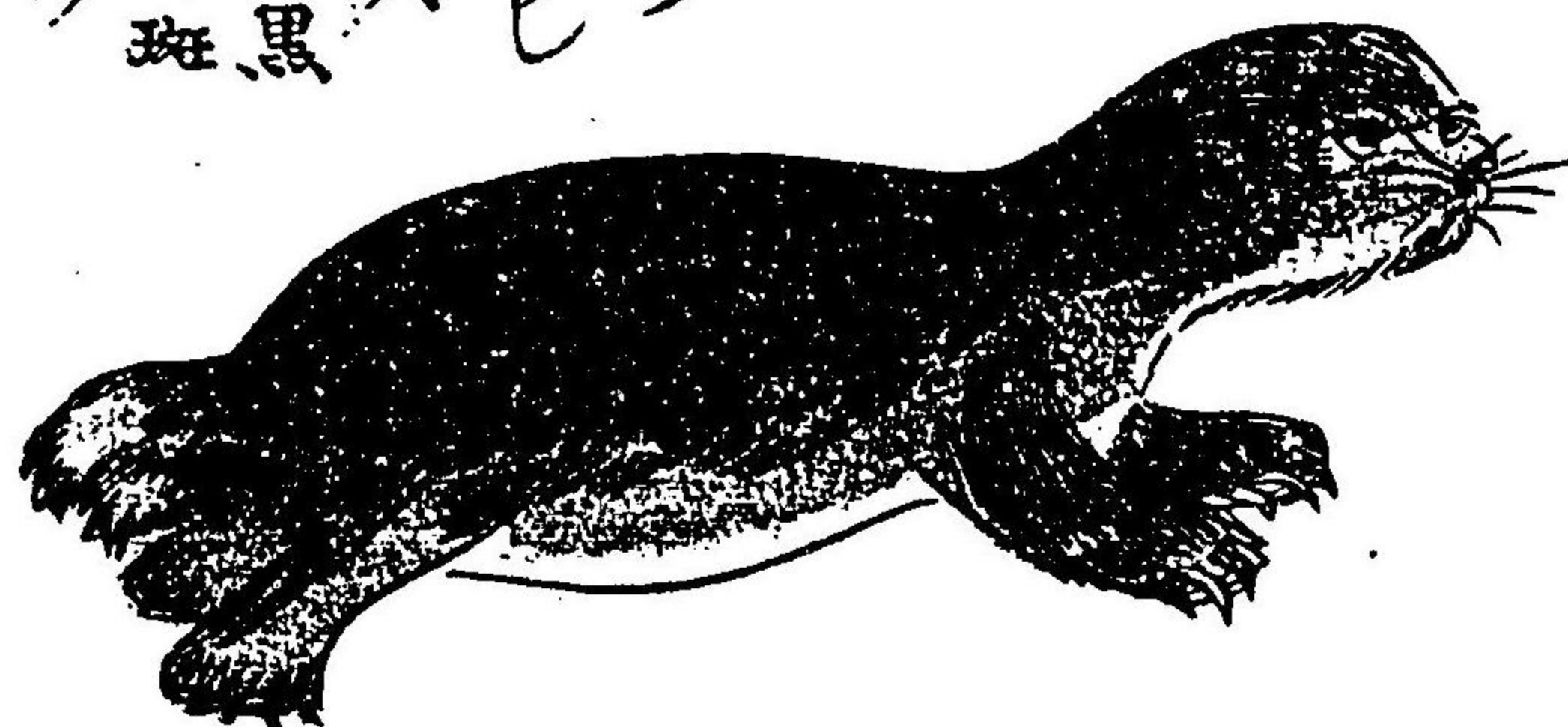
二三尺より  
四五尺  
色赭黒  
まじり毛  
長



海  
豹

あま  
し

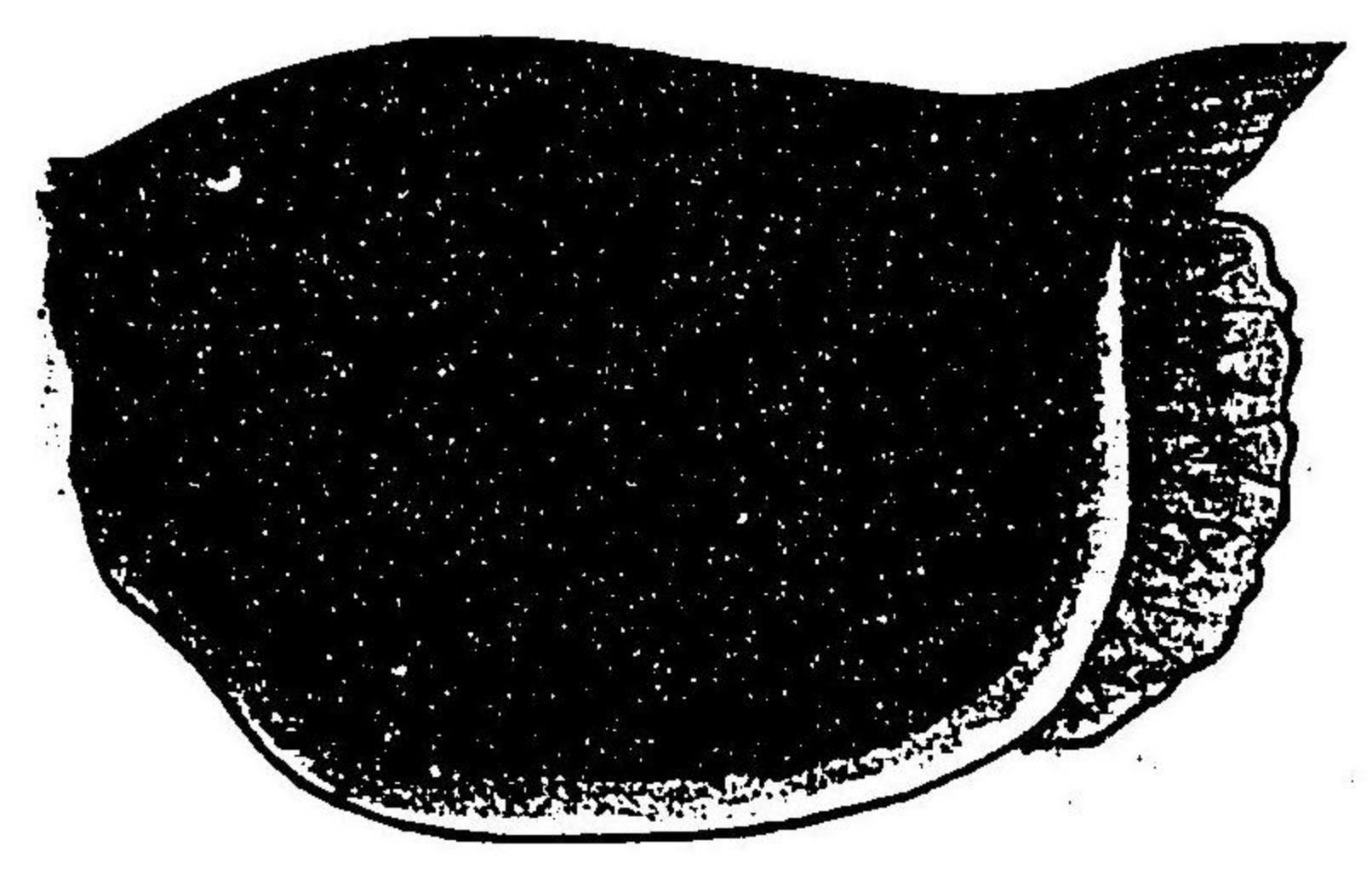
六足の  
あま  
し  
三四尺  
色淡黒  
まじり毛  
故あり





楂魚 翻車魚 まんぢり

三四尺  
より五六  
尺  
色淡黒  
青を帯  
鱗あり

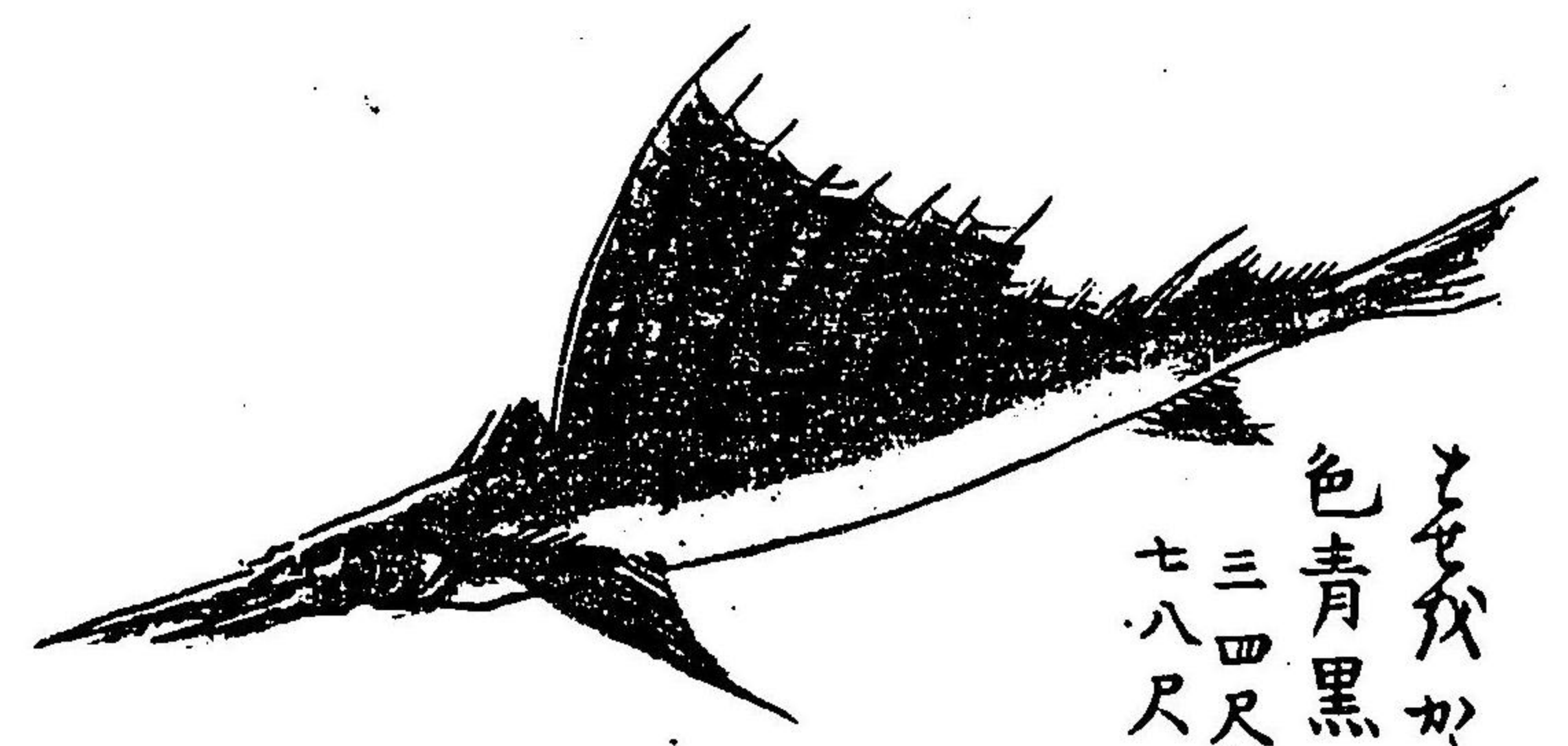


海馬

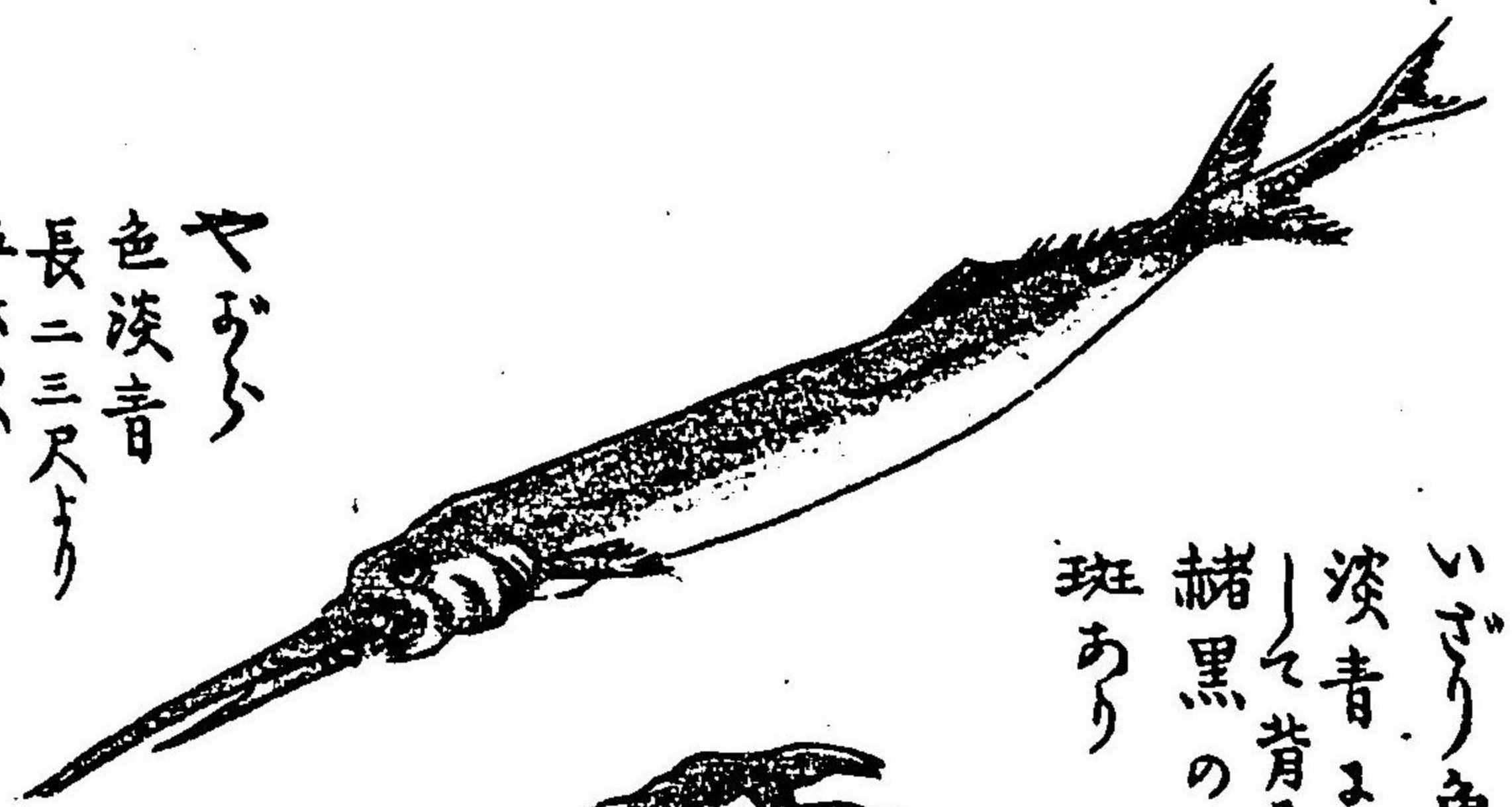
八九尺より  
一丈餘  
色淡赭  
毛短し



とせいかげ  
色青黒  
三四尺より  
七八尺



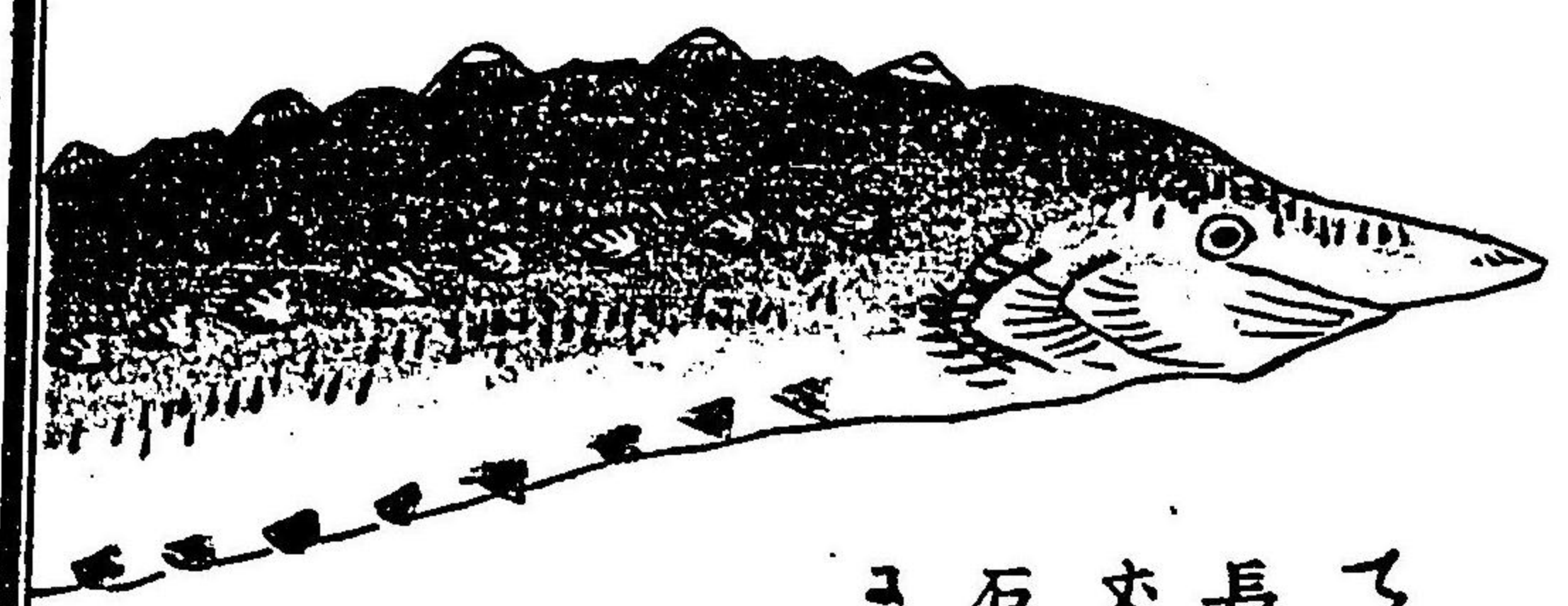
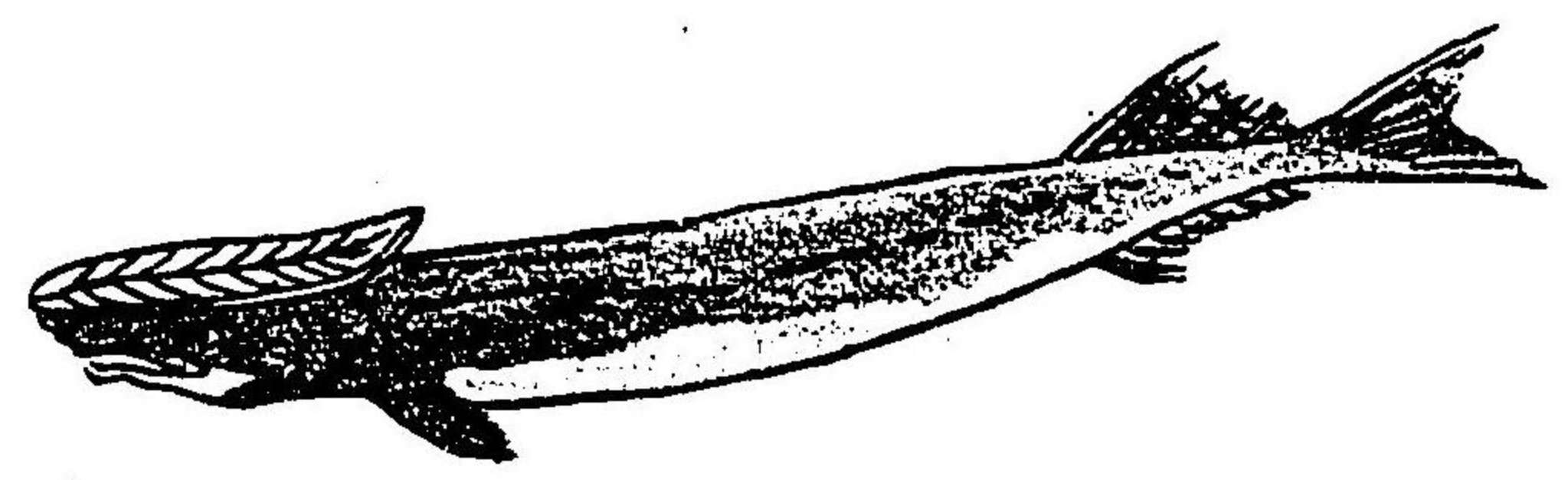
いざり魚  
淡青より  
赭黒の  
斑あり



ヤブ  
色淡青  
長二三尺より  
五六尺

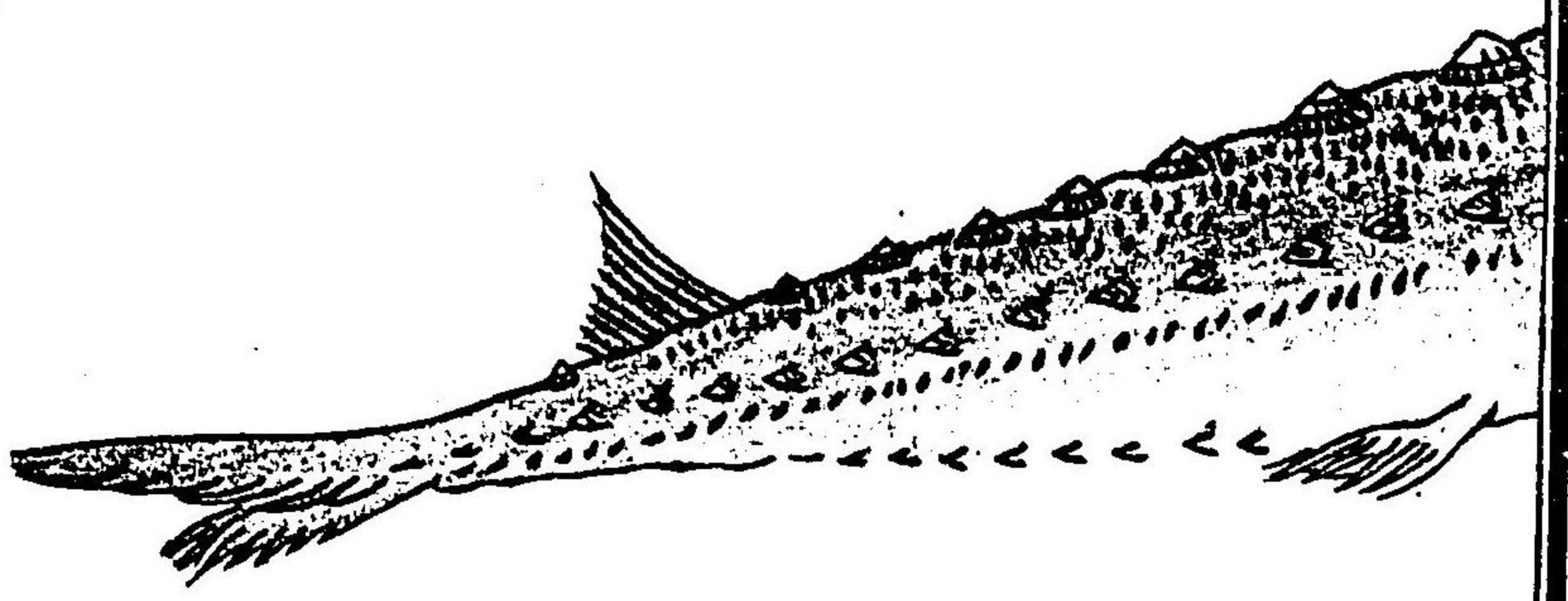
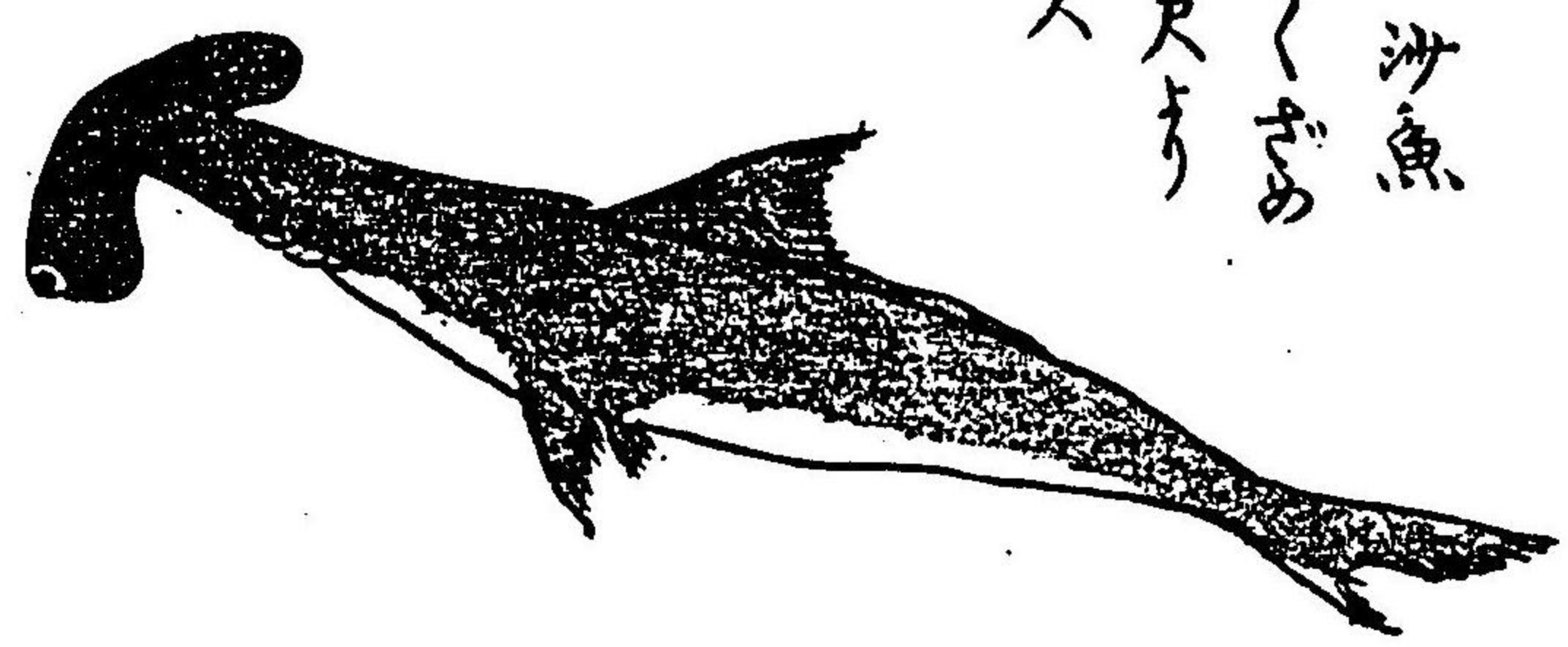


こまん  
たかさ  
長三尺餘  
色赭黒



ふざめ  
長三四尺より  
丈餘より  
石狩川口邊  
産す

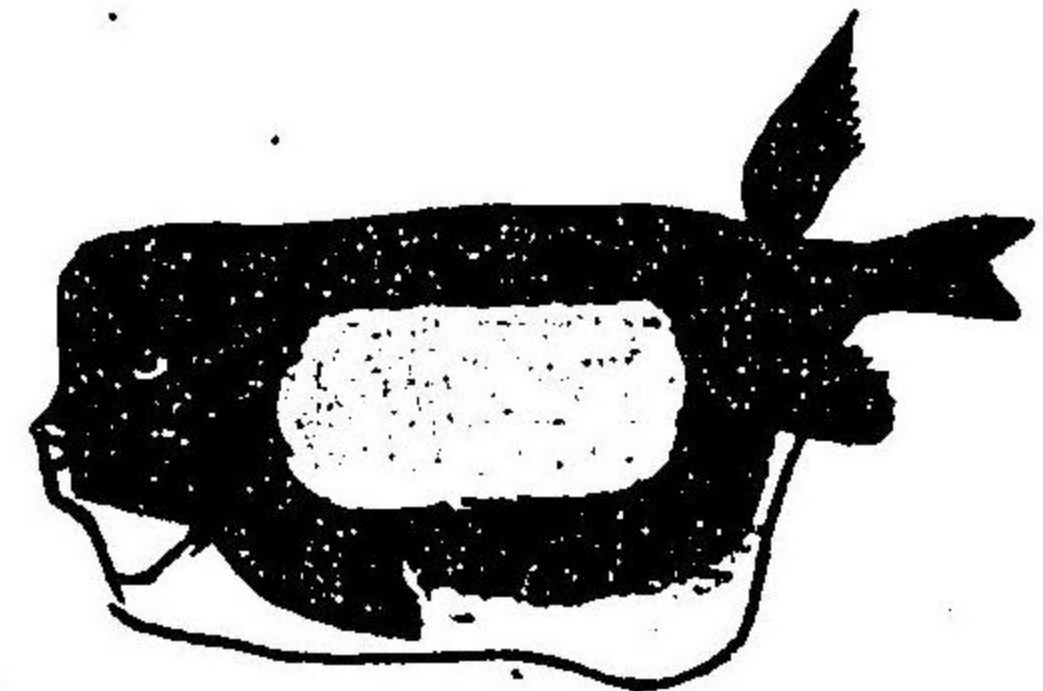
雙髻沙魚  
志由くさめ  
長二尺より  
七八尺



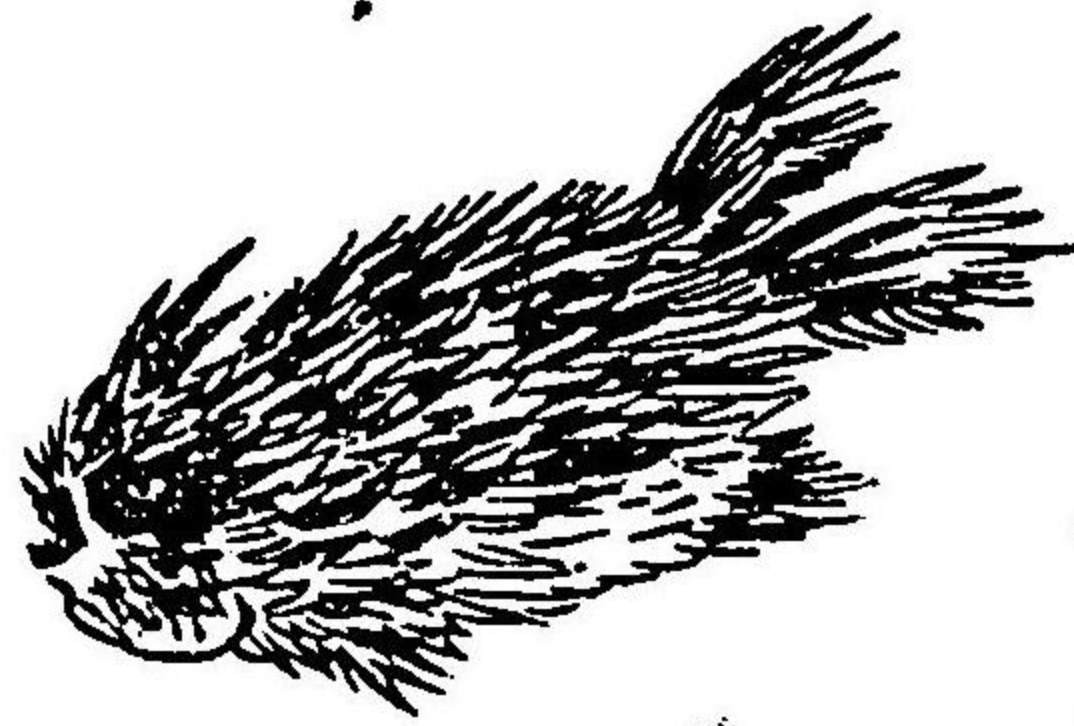




サウダ  
三尺餘  
色淡黒  
蛤類を食ふ  
口中齒牙數十  
枚重多生け



ヒメ

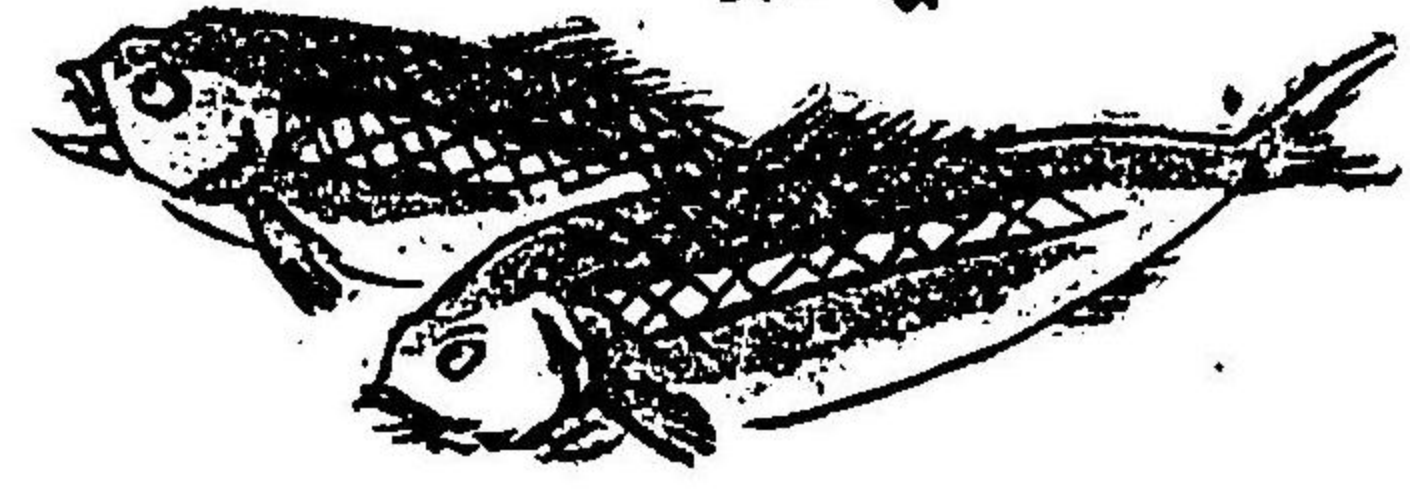


ヒメ



ヒメ

魚 形味甚  
胡瓜の如



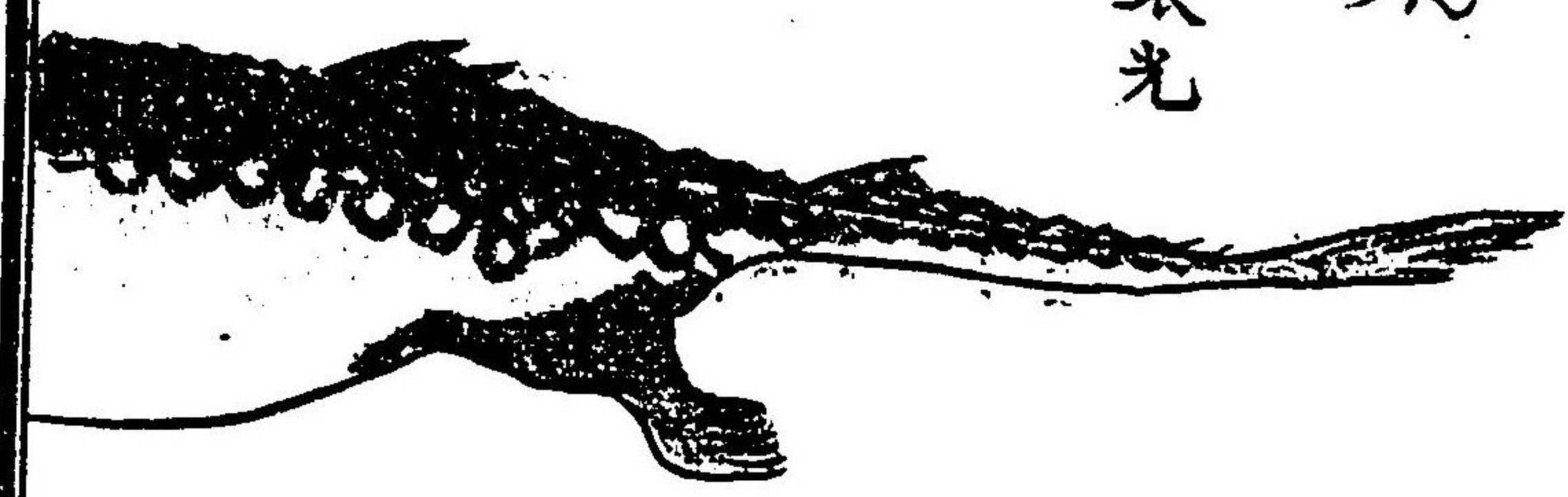
鰐 五六尺  
丈餘  
甲黒  
腹白



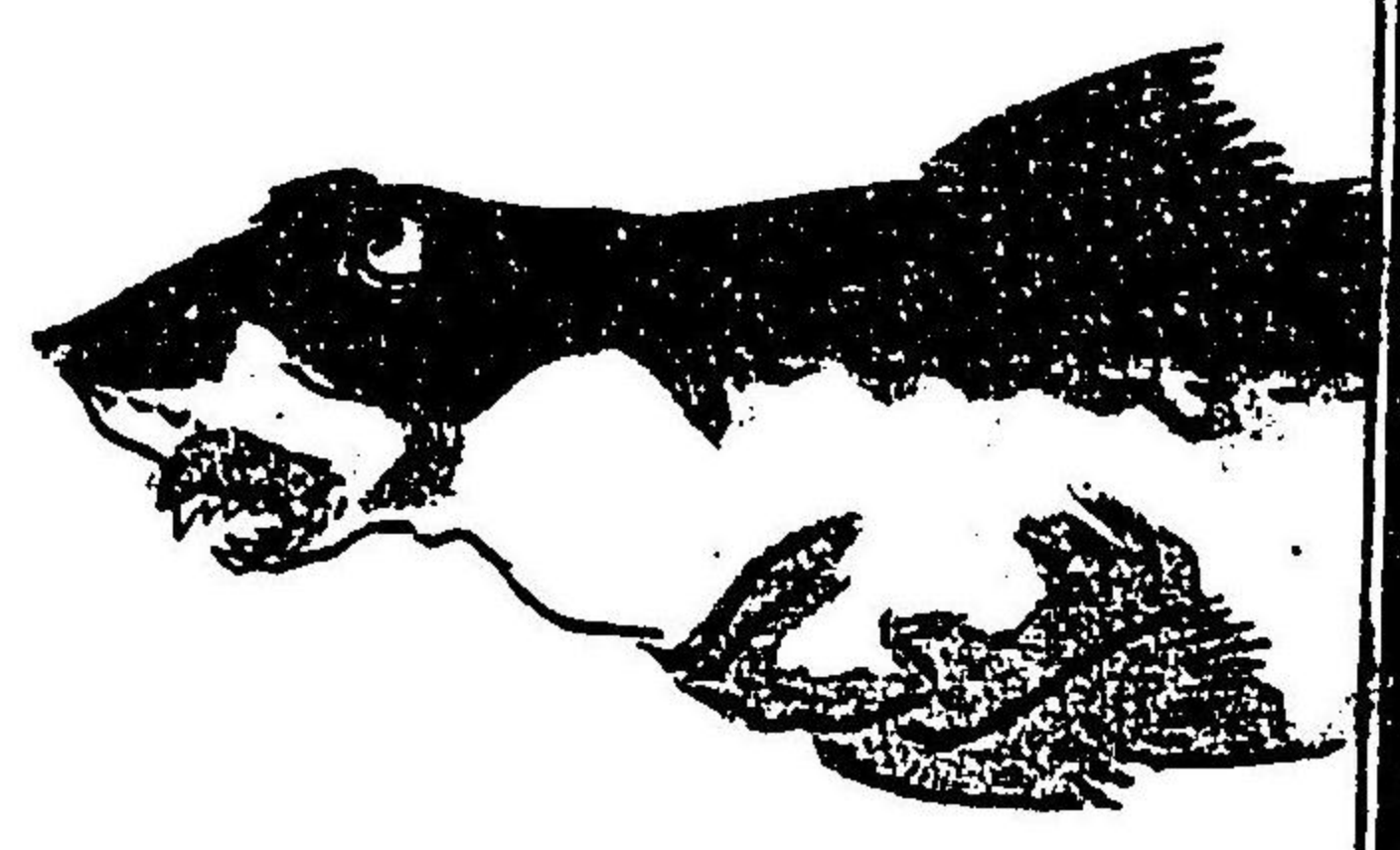
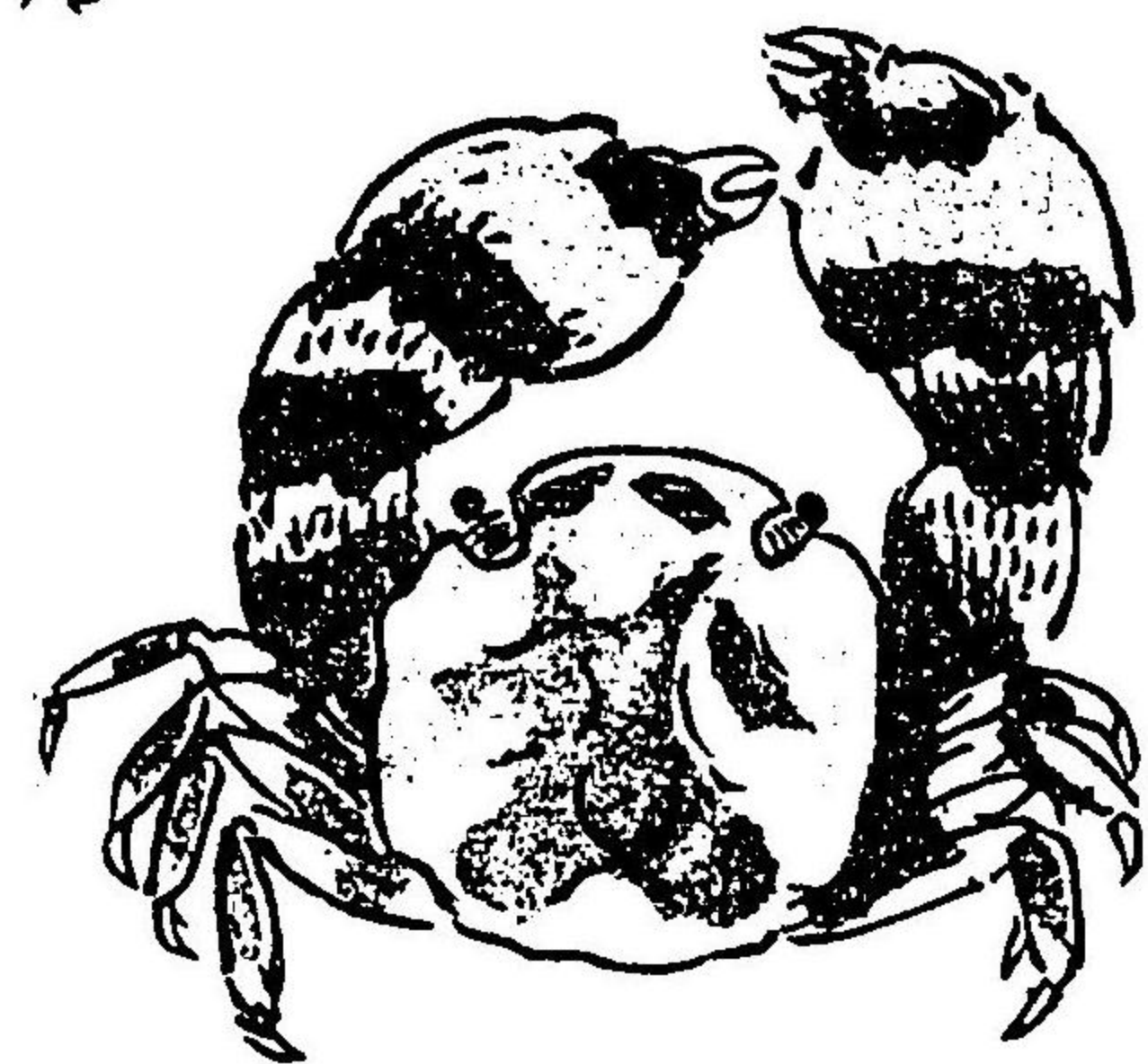
かさゑび  
色青黒六足ニ手



銀鮫  
四五尺  
色黒赭銀光  
あり



おくぞかた  
根室邊ニ居





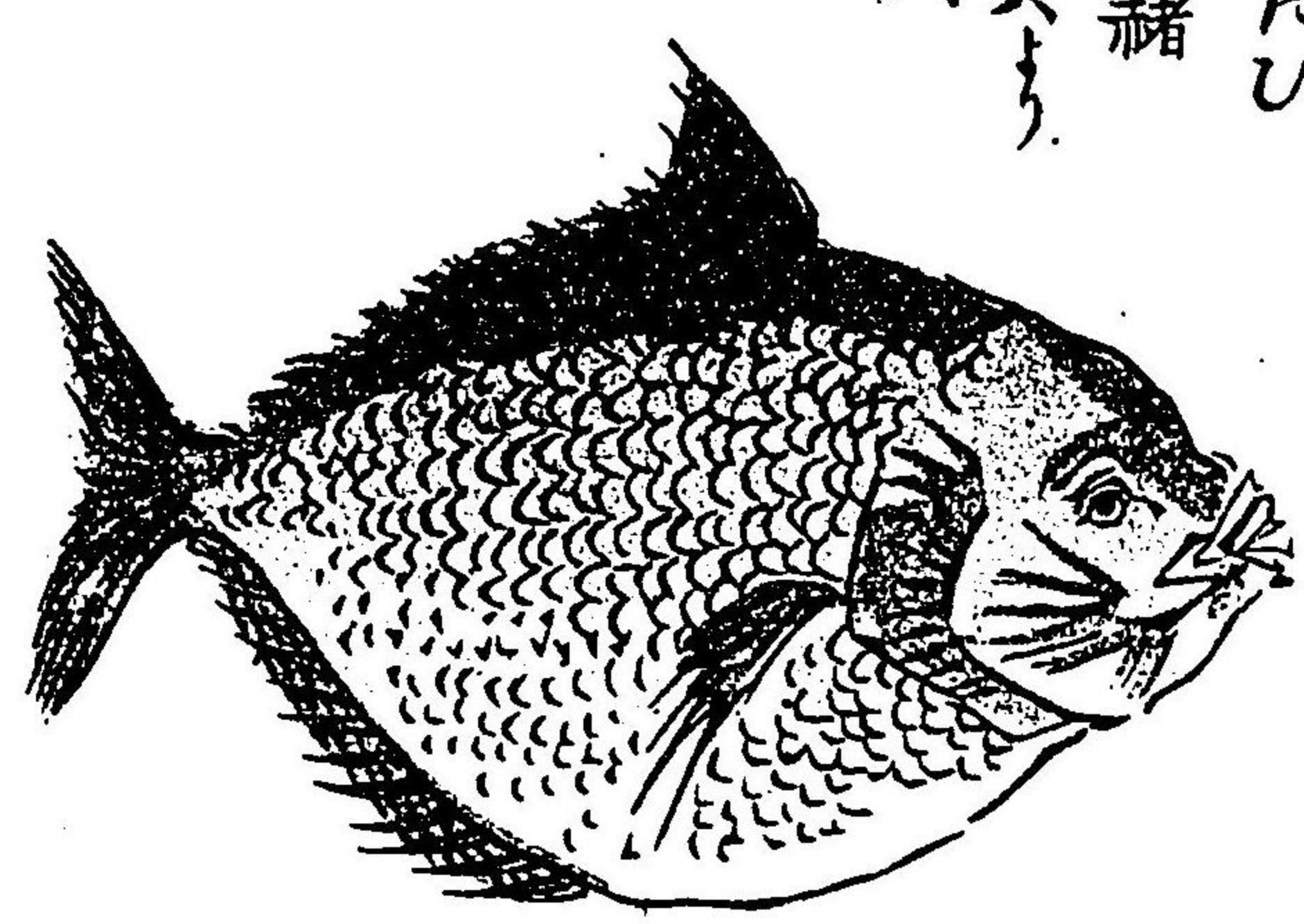
かぶりがに 腹は螯十二あり



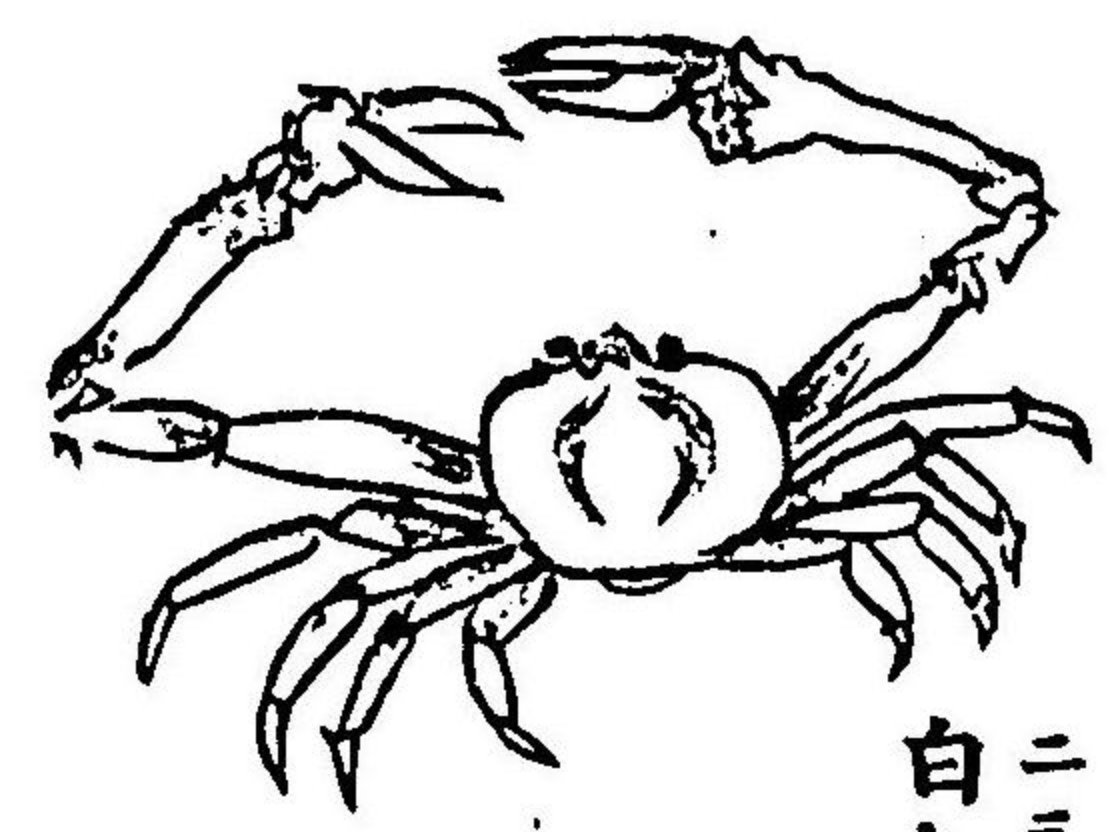
蟹 かぶりがに 甲 色黒紫 二尺より 三四尺尾の 長同し



ほんだい 色淡赭 一二尺より 四五尺



青黒色 能登海岸に 多くあり



白色 二三寸

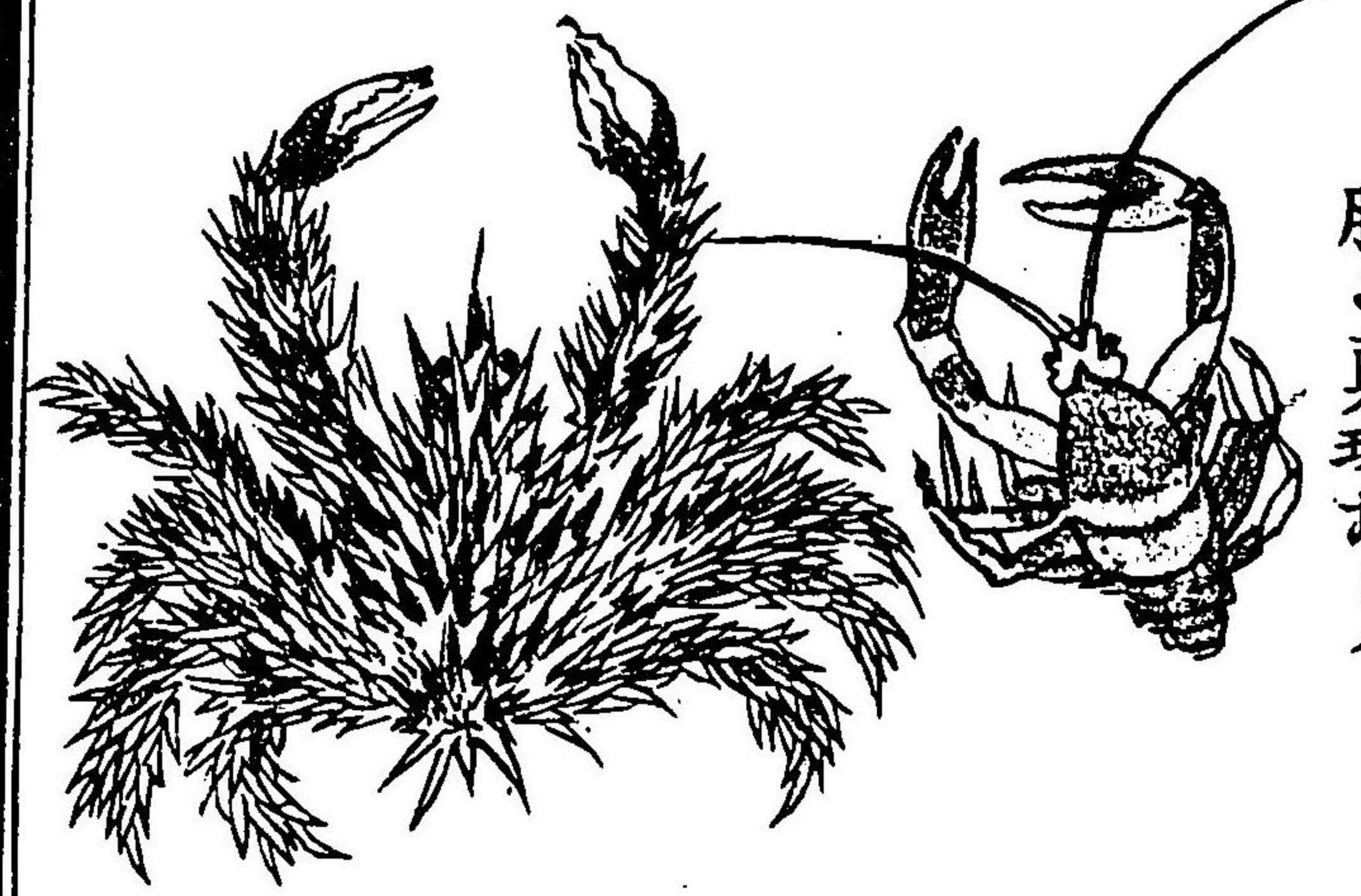


志ほかに  
小樽邊に居る

とりかに

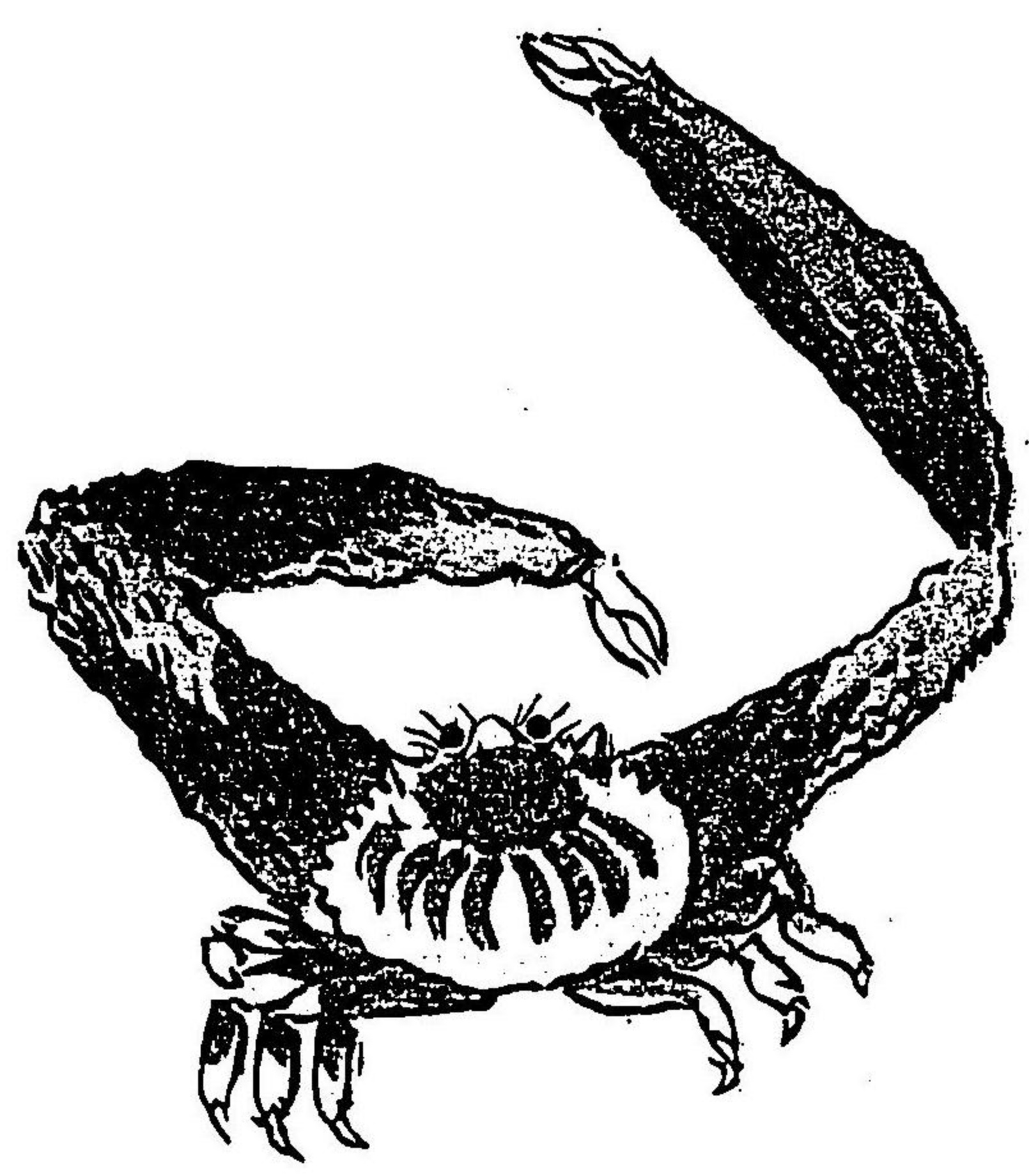


ふくりせんきり  
又きりかに  
脳は真珠あり

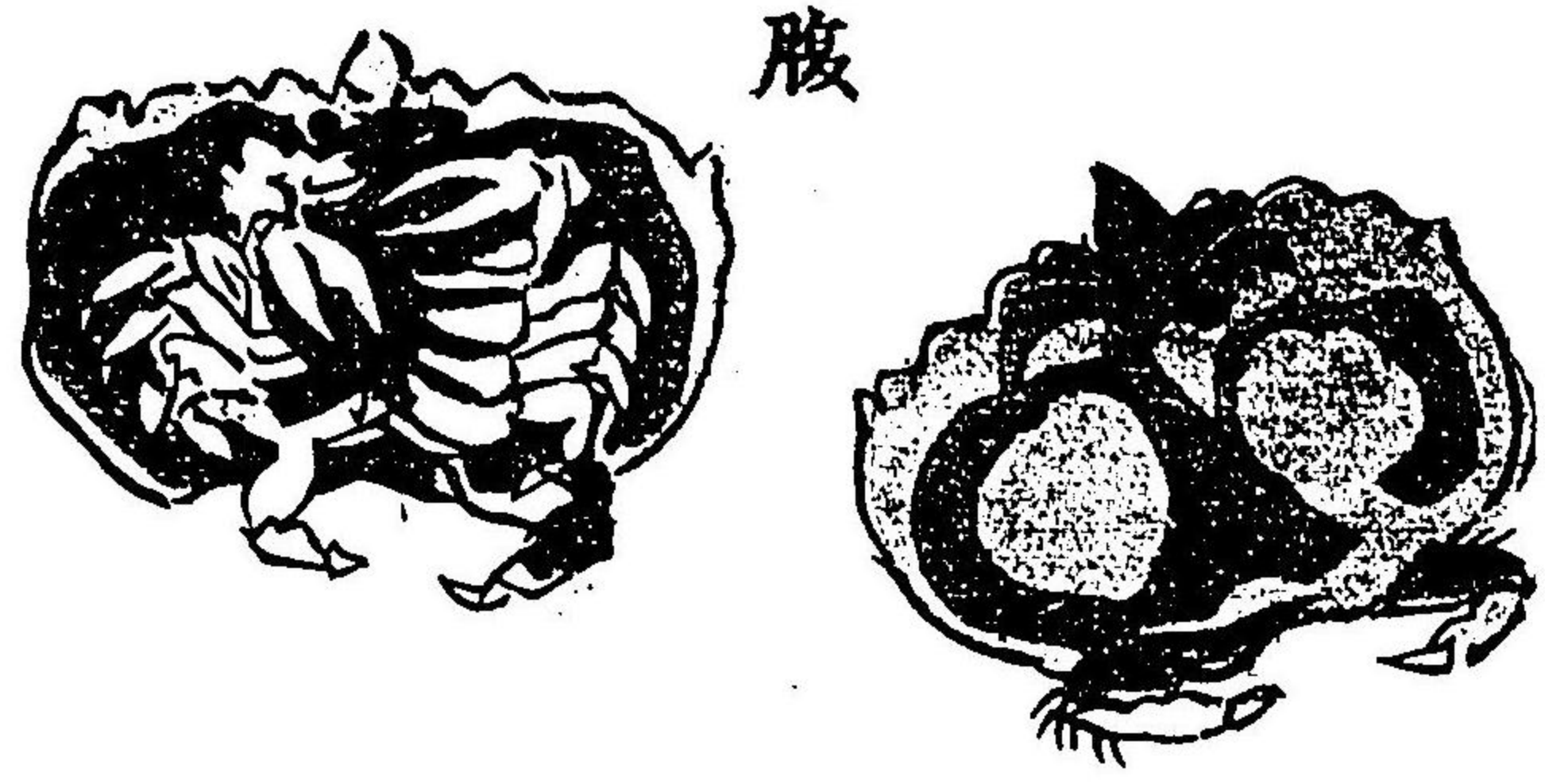


ゑんこうかに

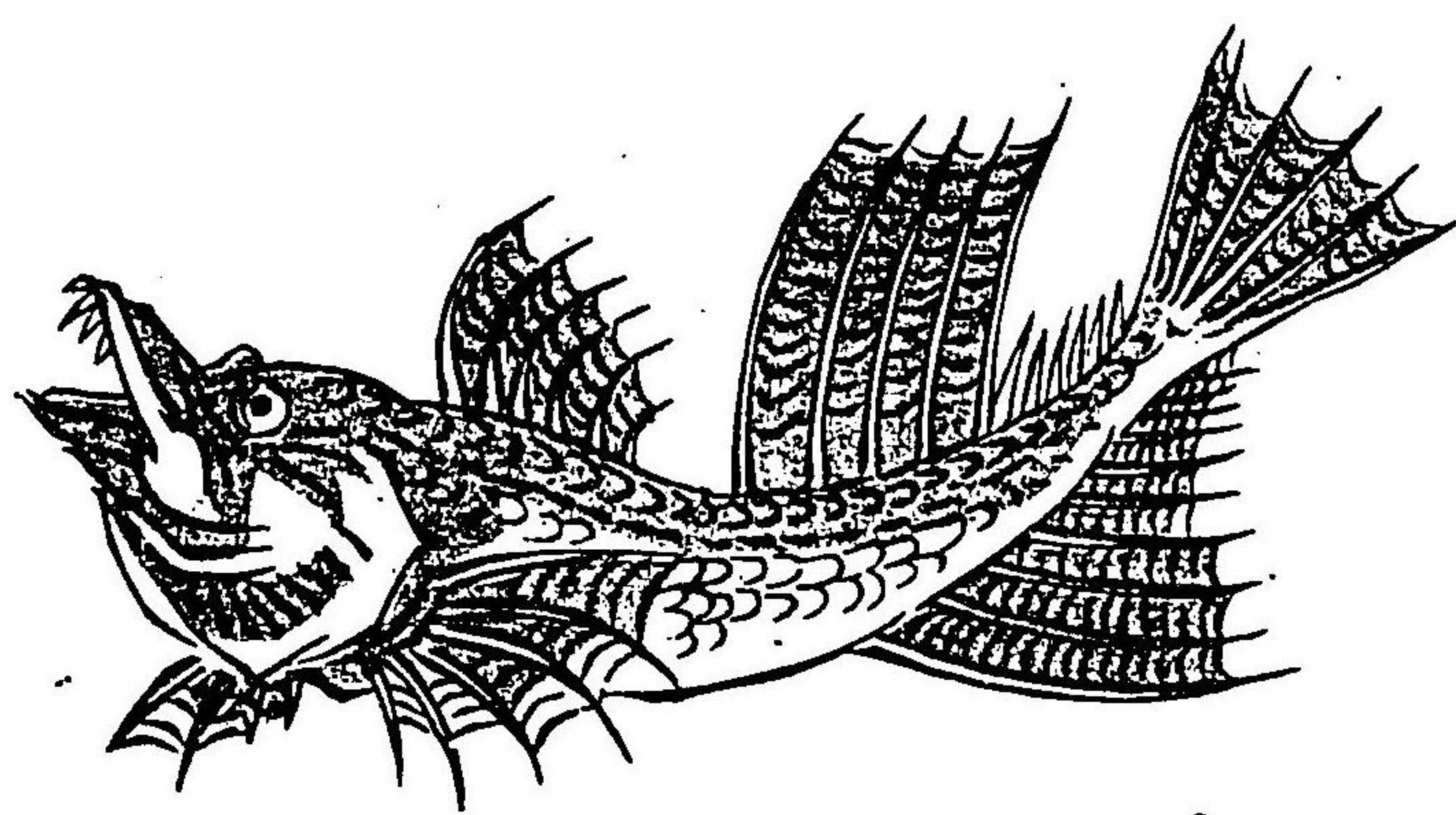
えぐた甲



同腹







虎魚 志やち不こ  
長二尺餘色淡白  
小者よの六七八寸

余嘗見山海經。所載動物。異形殊跡。使人不堪怪訝。以為是漢人捏造。任筆臆誕。後生而已。地球雖大。安有若此者哉。頃遊于北海。觀水產博覽場。有異形殊跡。不可名字者。夫北海距內地。僅一帶水。而產異物。不可數盡也。想天下之大。五洲之廣。窮夜國冰界之地。其所產果如何也。漢人虛妄。雖不中亦不遠也。嗚呼造物者。作為此怪々奇々無數動物。使生活水陸。抑亦有何功益。然自彼怪奇者。見弗怪奇者。反可為怪奇。不知怪者弗怪也。與弗奇者。奇也。與。余欲問之造物者。造物者恐言。如子者則怪奇中怪奇者矣。

芝山外史識于函館客窗下



187  
2  
98

全 明治三十三年三月二日 印刷  
年三月八日 發行

不許  
複製

校閱者

石川鴻齋

東京芝區片門前町三丁目十四番地

發行者

八木勘五郎

函館末廣町五番地

印刷者

松邑孫吉

東京東區橋區弓町十三番地

發兌元 函館末廣町

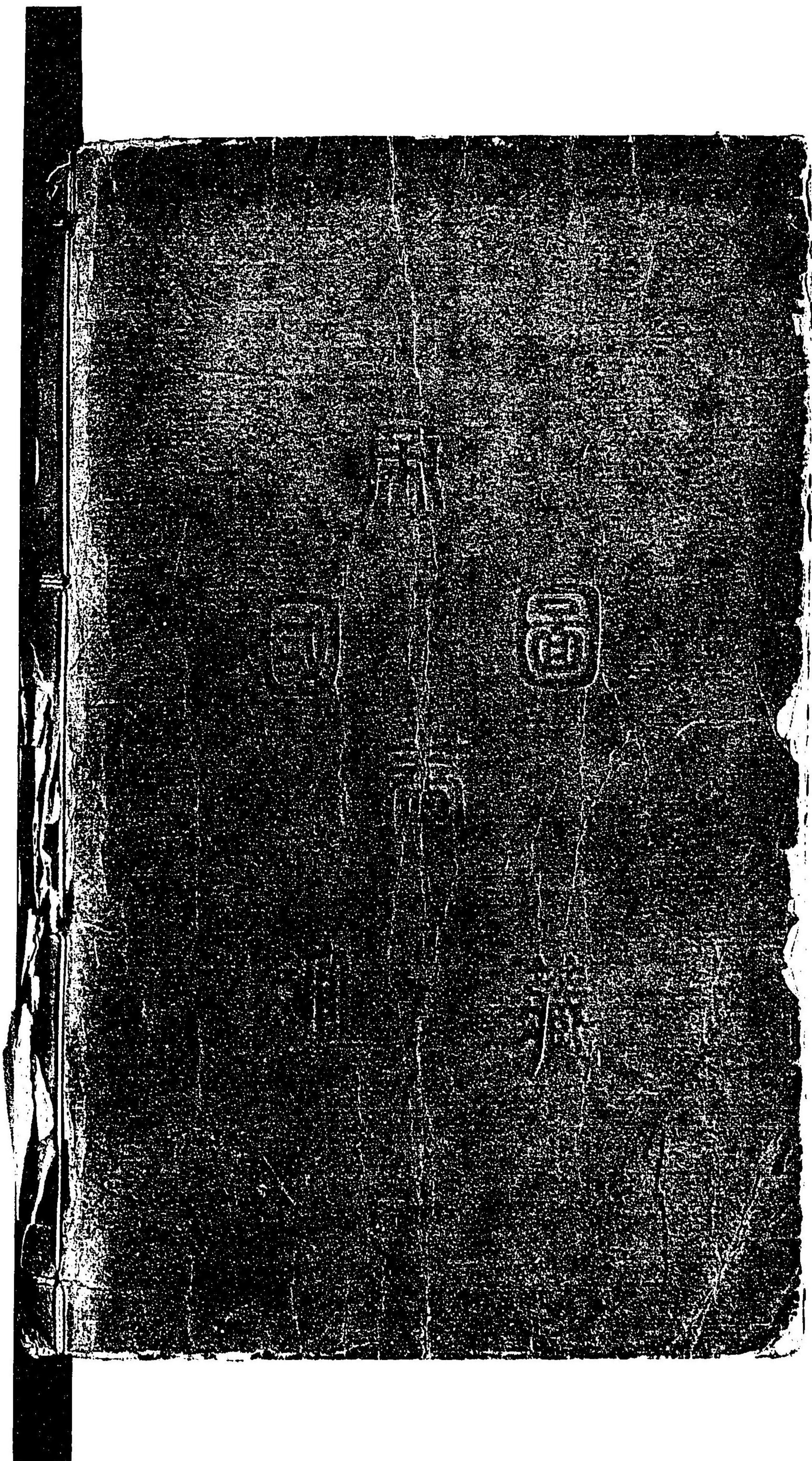
魁文舎

魁文舎藏



187  
1  
98







187  
98

023177-000-9

187-98

蝦夷みやげ

無名氏/著

M33

ADC-0014





187  
98

蝦夷  
みやけ  
下